

Sun Java System Directory Server
Enterprise Edition 6.3.1 リリースノート

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
1 互換性について	17
プラットフォームのサポート	17
システム仮想化サポート	18
Directory Server の変更点	19
Directory Proxy Server の変更点	20
Identity Synchronization for Windows の変更点	20
Directory Server Resource Kit の変更点	21
Directory Editor の変更点	21
ソフトウェアのサポート	22
2 インストールの注意点	23
サポートサービスとライセンス	24
サポートサービス	24
Directory Server Enterprise Edition で管理するエントリのライセンス	24
Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の新機能	25
ソフトウェアの入手	25
ハードウェア要件	26
Directory Server のハードウェア要件	26
Directory Proxy Server のハードウェア要件	26
オペレーティングシステムの要件	27
Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit のオペレーティングシステム要件	27
ソフトウェア依存関係の要件	30
コネクタの要件	31
ファイアウォール環境での Directory Server プラグインの要件	31
Directory Service Control Center でサポートされるブラウザ	32

インストールに必要な特権と資格	32
Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権	33
インストール手順	34
ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 に アップグレードする	43
ZIP 形式の配布を使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグ レードする	49
Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 のイン ストール	52
Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 のインス トール	52
アンインストール手順	53
ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 からダウ ングレードする	53
ZIP 形式の配布を使用して Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 からダウング レードする	56
3 Directory Server の修正されたバグと既知の問題点	57
Directory Server 6.3.1 で修正されたバグ	57
Directory Server の既知の問題点と制限事項	61
Directory Server の制限事項	61
Directory Server 6.3.1 の既知の問題点	64
4 Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点	89
Directory Proxy Server 6.3.1 で修正されたバグ	89
Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項	92
Directory Proxy Server の制限事項	92
Directory Proxy Server 6.3.1 の既知の問題点	92
Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1	99
Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 について	99
Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 で修正されたバグ	106
Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点	110
Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 の既知の問題点と制限事項	113

5 Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点	119
Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点	119
6 Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点	121
Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点	121
7 Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点	123
Directory Server Resource Kit の既知の問題点と制限事項	123

はじめに

このリリースノートでは、リリース時点で判明している、重要な情報を示します。ここでは、新機能や拡張機能、既知の制限事項や問題点、技術的な注意事項、その他の関連情報を説明します。Directory Server Enterprise Edition をお使いになる前に、このリリースノートをお読みください。

内容の紹介

このマニュアルは、以下の章で構成されています。

第1章「[互換性について](#)」では、以前のバージョンのコンポーネント製品との互換性や、Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアに対して今後予定されている変更について説明しています。

第2章「[インストールの注意点](#)」では、ハードウェアおよびソフトウェアの要件など、インストールに関連する事項を扱っています。

第3章「[Directory Server の修正されたバグと既知の問題点](#)」では、Directory Server の修正点および問題点の一覧を示しています。

第4章「[Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点](#)」では、Directory Proxy Server の修正点および問題点の一覧を示しています。

第5章「[Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点](#)」では、Identity Synchronization for Windows の修正点および問題点の一覧を示しています。

第6章「[Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点](#)」では、Directory Editor の修正点および問題点の一覧を示しています。

第7章「[Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点](#)」では、Directory Server Resource Kit の概要を紹介しています。この章では、Directory Server Resource Kit の修正点および問題点の一覧も示します。

Directory Server Enterprise Edition ドキュメントセット

この Directory Server Enterprise Edition ドキュメントセットでは、Sun Directory Server Enterprise Edition によるディレクトリサービスの評価方法、設計方法、配備方法、および管理方法について説明します。また、Directory Server Enterprise Edition 用クライアントアプリケーションの開発方法についても説明します。Directory Server Enterprise Edition ドキュメントセットは [Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 ドキュメントセンター『』](#) から入手できます。

Directory Server Enterprise Edition の概要については、次のドキュメントを記載順に確認してください。

表 P-1 Directory Server Enterprise Edition ドキュメント

ドキュメントタイトル	目次
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 Release Notes』	既知の問題点を含め、Directory Server Enterprise Edition についての最新情報を提供しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Release Notes』	Identity Synchronization for Windows、Directory Editor、および Directory Server Resource Kit のインストールについての情報を提供しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 7.0 Documentation Center』	マニュアルセットの重要な領域へのリンクを提供しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Evaluation Guide』	このリリースの重要な機能を紹介します。これらの機能の仕組みや提供される利点を、単独システムに実装可能な架空の配備のコンテキストに沿って例示します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 配備計画ガイド』	Directory Server Enterprise Edition をベースとする、可用性と拡張性に優れたディレクトリサービスを計画および設計する方法について説明します。配備の計画および設計の基本的な概念および原則を提示します。ソリューションのライフサイクルについて検討し、Directory Server Enterprise Edition ベースのソリューションを計画するために使用する概略レベルのサンプルおよび戦略を提供します。

表 P-1 Directory Server Enterprise Edition ドキュメント (続き)

ドキュメントタイトル	目次
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』	<p>注 - Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 をインストールするには、このリリースノート第 2 章「インストールの注意点」の手順を使用します。バージョン 6.3.1 をインストールするときは、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Installation Guide』のインストール手順を使用しないでください。</p> <p>Directory Server Enterprise Edition 6.3 ソフトウェアのインストール方法について説明します。インストールするコンポーネントを選択する方法、インストール後にそれらのコンポーネントを設定する方法、および設定したコンポーネントが正しく機能することを検証する方法を示します。</p> <p>Directory Editor のインストール手順については、http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1 コレクションを参照してください。</p> <p>Directory Editor をインストールする前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 リリースノート』の Directory Editor についての情報を必ずお読みください。</p>
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide』	Directory Server、Directory Proxy Server、および Identity Synchronization for Windows の以前のバージョンから移行する手順を示します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド』	<p>Directory Server Enterprise Edition をコマンド行から管理するための手順を示します。</p> <p>Directory Service Control Center (DSCC) を使用して Directory Server Enterprise Edition を管理する際のヒントおよび手順については、DSCC のオンラインヘルプを参照してください。</p> <p>Directory Editor の管理手順については、http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1 を参照してください。</p> <p>Identity Synchronization for Windows のインストールおよび設定手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』のパート II 「Identity Synchronization for Windows のインストール」を参照してください。</p>
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Developer's Guide』	Directory Server Enterprise Edition の一部として提供されるツールおよび API を利用して、ディレクトリクライアントアプリケーションを開発する方法を示します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Reference』	Directory Server Enterprise Edition の技術および概念の基礎を紹介し、コンポーネント、アーキテクチャー、プロセス、および機能について説明しています。開発者 API への参照も示しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Man Page Reference』	Directory Server Enterprise Edition を通じて利用可能なコマンド行ツール、スキーマオブジェクト、およびその他の公開インタフェースについて説明しています。このドキュメントの個別の節を、オンラインマニュアルページとしてインストールすることができます。

表 P-1 Directory Server Enterprise Edition ドキュメント (続き)

ドキュメントタイトル	目次
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 トラブルシューティングガイド』	さまざまなツールを使用して問題の範囲を特定し、データを収集し、問題部分の障害追跡を行う手順について説明しています。
『Sun Java System Identity Synchronization for Windows 6.0 Deployment Planning Guide』	Identity Synchronization for Windows の計画と配備に関する一般的なガイドラインやベストプラクティスを示しています。Identity Synchronization for Windows 製品はバージョン 6.0 のままです。

関連ドキュメント

SLAMD 分散負荷生成エンジンは、ネットワークベースのアプリケーションのパフォーマンスについて負荷テストを実行し、分析するために設計された Java アプリケーションです。このアプリケーションは、LDAP ディレクトリサーバーのパフォーマンスについてベンチマークを実行し、分析するために Sun Microsystems, Inc. によって開発されました。SLAMD は、OSI 認定オープンソースライセンスである Sun Public License に基づいて、オープンソースアプリケーションとして使用できます。SLAMD の詳細については、<http://www.slamd.com/> を参照してください。SLAMD は、java.net プロジェクトでも提供されています。<https://slamd.dev.java.net/> を参照してください。

Java Naming and Directory Interface (JNDI) テクノロジは、LDAP や DSML v2 による Java アプリケーションから Directory Server へのアクセスに対応しています。JNDI の詳細については、<http://java.sun.com/products/jndi/> を参照してください。『JNDI Tutorial』には、詳しい説明と JNDI の使用例が記載されています。このチュートリアルは、<http://java.sun.com/products/jndi/tutorial/> で参照できます。

Directory Server Enterprise Edition のライセンス形態には、スタンドアロン製品、Sun Java Enterprise System のコンポーネント、Sun Java Identity Management Suite などの Sun 製品群の一部、または Sun が提供するほかのソフトウェア製品へのアドオンパッケージがあります。Java Enterprise System は、ネットワークまたはインターネット環境で分散配備されるエンタープライズアプリケーションをサポートするソフトウェアインフラストラクチャーです。Directory Server Enterprise Edition が Java Enterprise System のコンポーネントとしてライセンスされる場合、<http://docs.sun.com/coll/1286.3> のシステムドキュメントに目を通しておくことをお勧めします。

Identity Synchronization for Windows は Message Queue を制限されたライセンスで使用します。Message Queue のマニュアルは <http://docs.sun.com/coll/1307.2> から入手できます。

Identity Synchronization for Windows は、Microsoft Windows のパスワードポリシーを管理するための製品です。

- Windows 2003 のパスワードポリシーについての情報は、[Microsoft TechNet Web サイト](#)で公開されています。
- Microsoft 証明書サービスのエンタープライズルート認証局に関する情報は、[Microsoft サポートオンライン Web サイト](#)で公開されています。
- Microsoft システムでの LDAP over SSL の設定に関する情報は、[Microsoft サポートオンライン Web サイト](#)で公開されています。

再頒布可能ファイル

Directory Server Enterprise Edition のファイルは、再頒布できません。

デフォルトパスとコマンドの場所

このセクションでは、複数のオペレーティングシステムや配備の種類別に、このドキュメントで使用されるデフォルトパスとコマンドの場所を示します。

デフォルトパス

次の表では、このドキュメントで使用するデフォルトのパスについて説明します。インストールされるファイルの詳細な説明については、次の製品ドキュメントを参照してください。

- 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Reference』の第 14 章「Directory Server File Reference」
- 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Reference』の第 25 章「Directory Proxy Server File Reference」

表P-2 デフォルトパス

ブレースホルダ	説明	デフォルト値
<i>install-path</i>	<p>Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアのベースインストールディレクトリを表します。</p> <p>ソフトウェアは、このベース <i>install-path</i> の下位のディレクトリにインストールされます。たとえば、Directory Server ソフトウェアは <i>install-path/ds6/</i> にインストールされます。</p>	<p><code>dsee_deploy(1M)</code> を使用して ZIP 形式の配布からインストールすると、デフォルトの <i>install-path</i> がカレントディレクトリになります。<i>install-path</i> を設定するには、<code>dsee_deploy</code> コマンドの <code>-i</code> オプションを使用します。</p> <p>Java Enterprise System インストーラを使用するなどしてネイティブパッケージ配布からインストールする場合、デフォルトの <i>install-path</i> は次のいずれかの場所になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Solaris システム - <code>/opt/SUNWdsee/</code> ■ Red Hat システム - <code>/opt/sun/</code> ■ Windows システム - <code>C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE</code>
<i>instance-path</i>	<p>Directory Server または Directory Proxy Server のインスタンスのフルパスを表します。</p> <p>このマニュアルでは、Directory Server には <code>/local/ds/</code> を、Directory Proxy Server には <code>/local/dps/</code> を使用します。</p>	<p>デフォルトパスはありません。インスタンスパスは、常にローカルファイルシステム上に存在するようにします。</p> <p>推奨されるディレクトリは次のとおりです。</p> <p><code>/var</code> (Solaris システム)</p> <p><code>/global</code> (Sun Cluster を使用する場合)</p>

コマンドの場所

この節で示す次の表は、Directory Server Enterprise Edition のマニュアルで使用されるコマンドの場所の一覧です。各コマンドの詳細については関連するマニュアルページを参照してください。

表P-3 コマンドの場所

コマンド	Java ES, ネイティブパッケージ配布	ZIP形式の配布
cacaoadm	Solaris - /usr/sbin/cacaoadm	Solaris - install-path/dsee6/ cacao_2/usr/sbin/cacaoadm
	Red Hat - /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm	Red Hat、HP-UX - install-path/dsee6/ cacao_2/cacao/bin/cacaoadm
	Windows - install-path\share\ cacao_2\bin\cacaoadm.bat	Windows - install-path\ dsee6\cacao_2\bin\cacaoadm.bat
certutil	Solaris - /usr/sfw/bin/certutil	install-path/dsee6/bin/certutil
	Red Hat - /opt/sun/private/bin/certutil	
dpadm(1M)	install-path/dps6/bin/dpadm	install-path/dps6/bin/dpadm
dpconf(1M)	install-path/dps6/bin/dpconf	install-path/dps6/bin/dpconf
dsadm(1M)	install-path/ds6/bin/dsadm	install-path/ds6/bin/dsadm
dscmcom(1M)	install-path/dscc6/bin/dscmcom	install-path/dscc6/bin/dscmcom
dsccreg(1M)	install-path/dscc6/bin/dsccreg	install-path/dscc6/bin/dsccreg
dscsetup(1M)	install-path/dscc6/bin/dscsetup	install-path/dscc6/bin/dscsetup
dsconf(1M)	install-path/ds6/bin/dsconf	install-path/ds6/bin/dsconf
dsee_deploy(1M)	提供されていません	install-path/dsee6/bin/dsee_deploy
dsmig(1M)	install-path/ds6/bin/dsmig	install-path/ds6/bin/dsmig
entrycmp(1)	install-path/ds6/bin/entrycmp	install-path/ds6/bin/entrycmp
fildif(1)	install-path/ds6/bin/fildif	install-path/ds6/bin/fildif
idsktune(1M)	提供されていません	ZIP形式の配布パッケージを解凍したディレクトリにあります
insync(1)	install-path/ds6/bin/insync	install-path/ds6/bin/insync
ns-accountstatus(1M)	install-path/ds6/bin/ns-accountstatus	install-path/ds6/bin/ns-accountstatus
ns-activate(1M)	install-path/ds6/bin/ns-activate	install-path/ds6/bin/ns-activate

表 P-3 コマンドの場所 (続き)

コマンド	Java ES, ネイティブパッケージ配布	ZIP 形式の配布
<code>ns-inactivate(1M)</code>	<code>install-path/ds6/bin/ns-inactivate</code>	<code>install-path/ds6/bin/ns-inactivate</code>
<code>repldisc(1)</code>	<code>install-path/ds6/bin/repldisc</code>	<code>install-path/ds6/bin/repldisc</code>
<code>schema_push(1M)</code>	<code>install-path/ds6/bin/schema_push</code>	<code>install-path/ds6/bin/schema_push</code>
<code>smcwebserver</code>	Solaris, Linux - <code>/usr/sbin/smcwebserver</code>	このコマンドは、ネイティブパッケージ配布を使用してインストールされる DSCC のみに関係します。
	Windows - <code>install-path\share\webconsole\bin\smcwebserver</code>	
<code>wcadmin</code>	Solaris, Linux - <code>/usr/sbin/wcadmin</code>	このコマンドは、ネイティブパッケージ配布を使用してインストールされる DSCC のみに関係します。
	Windows - <code>install-path\share\webconsole\bin\wcadmin</code>	

書体の表記規則

次の表では、このガイドで使用する書体の違いについて説明します。

表 P-4 書体の表記規則

字体または記号	意味	例
<code>AaBbCc123</code>	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力を示します。	<code>.login</code> ファイルを編集します。 すべてのファイルを一覧表示するには、 <code>ls -a</code> を使用します。 <code>machine_name% you have mail.</code>
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力とは区別して示します。	<code>machine_name% su</code> Password:
<i>AaBbCc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するコマンドは、 <code>rm filename</code> です。

表 P-4 書体の表記規則 (続き)

字体または記号	意味	例
<i>AaBbCc123</i>	参照する書名、新しい用語、および強調する用語を表します (一部の強調項目はオンラインでは太字で表示されます)。	『ユーザーズガイド』の第6章を参照してください。 キャッシュは、ローカルに保存されたコピーです。 ファイルを保存しないでください。

コマンドのシェルプロンプトの例

次の表は、デフォルトのシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを示します。

表 P-5 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
UNIX および Linux システムの C シェル	machine_name%
UNIX および Linux システムの C シェルのスーパーユーザー	machine_name#
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	#
Microsoft Windows のコマンド行	C:\

記号の表記規則

次の表は、このマニュアルで使用される記号の一覧です。

表 P-6 記号の表記規則

記号	説明	例	意味
[]	省略可能な引数やコマンドオプションが含まれます。	ls [-l]	-l オプションは省略可能です。
{ }	必須のコマンドオプションの選択肢を囲みます。	-d {y n}	-d オプションでは、y か n のどちらかの引数を使用する必要があります。
\${ }	変数参照を示します。	\${com.sun.javaRoot}	com.sun.javaRoot 変数の値を参照します。

表 P-6 記号の表記規則 (続き)

記号	説明	例	意味
-	同時に押すキーを連結します。	Control-A	Ctrl キーと A キーを同時に押します。
+	連続して押すキーを連結します。	Ctrl+A+N	Ctrl キーを押し、離してから、以後のキーを続けて押します。
→	グラフィカルユーザーインタフェースで選択するメニュー項目を示します。	「ファイル」→「新規」→「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから、「テンプレート」を選択します。

改訂履歴

次の表では、このドキュメントの各バージョンでの変更内容について説明します。

表 P-7 改訂履歴

Date	変更の説明
2009年2月	初期リリース
2009年12月	Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の Directory Proxy Server コンポーネントの問題を修正する Directory Proxy Server 6.3.1 アップデート1 バッチについての説明、 Directory Server の既知の問題とその回避方法、および Identity Synchronization for Windows の既知の問題とその回避方法が主な内容です。
2010年5月	セキュリティーパッチ 142807-02 および 143463-01 のインストールについての最新情報

互換性について

この章では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品から削除されたか、または非推奨となった機能について説明します。また、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品の機能のうち、削除される可能性がある機能と非推奨となる可能性がある機能についても説明します。

この章では、次の内容について説明します。

- 17 ページの「プラットフォームのサポート」
- 19 ページの「Directory Server の変更点」
- 20 ページの「Directory Proxy Server の変更点」
- 20 ページの「Identity Synchronization for Windows の変更点」
- 21 ページの「Directory Server Resource Kit の変更点」
- 21 ページの「Directory Editor の変更点」

インタフェースの安定性の度合いについては、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Man Page Reference](#)』において、マニュアルページのエントリごとに示されています。

プラットフォームのサポート

Directory Server Enterprise Edition の将来のリリースでは、Windows 2000、Red Hat Advanced Server 3.0、および J2SE プラットフォーム 1.4 はサポートされなくなる可能性があります。Solaris オペレーティングシステム以外のプラットフォームのネイティブインストールパッケージリリースはサポートされなくなる可能性があります。一部プラットフォームでは、32 ビット版ソフトウェアのサポートがなくなる可能性があります。これに備えて、64 ビット版ソフトウェアへの移行と、サポートされているオペレーティングシステムのより新しいバージョンへの移行について計画してください。サポートされているオペレーティングシステムのより新しいバージョンについては、27 ページの「[オペレーティングシステムの要件](#)」を参照してください。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 は、Solaris 10 Update 3 およびそれ以降のバージョンの SPARC プラットフォームで論理ドメイン (LDoms) をサポートしています。LDoms の詳細については、『[Logical Domains \(LDoms\) 1.0.1 Administration Guide](#)』を参照してください。

システム仮想化サポート

システム仮想化は、共有ハードウェア上で複数のオペレーティングシステム (OS) インスタンスを個別に動作させるためのテクノロジーです。機能的には、仮想化環境で動作する OS に配備されるソフトウェアは、ベースとなるプラットフォームが仮想化されていることを認識しないのが一般的です。Sun では、代表的なシステム仮想化環境および OS を組み合わせて Sun Java System 製品のテストを実施しています。テストの目的は、適切にサイジングおよび設定された仮想化環境上で、仮想化されていないシステム上での動作と同様に Sun Java System 製品が正常な動作を継続することの検証です。仮想化環境での Sun Java System 製品に対する Sun のサポートについては、『[System Virtualization Support in Sun Java System Products](#)』を参照してください。

このリリースでは、Directory Server Enterprise Edition 6.3 ソフトウェアがすでにネイティブでサポートしている OS であれば、Sun Microsystems は VMware テクノロジー上で動作するすべての OS をサポートします。Sun Microsystems は、OS とハードウェアのすべての組み合わせを保証するわけではありませんが、基礎となる VMware テクノロジーの実装に依存します。VMware テクノロジーでの Directory Server Enterprise Edition 6.3 ソフトウェアの完全配備はお勧めしません。

注 - 仮想化環境への Identity Synchronization for Windows のインストールはサポートされていません。

このリリースの Directory Server Enterprise Edition でサポートされているハードウェアプラットフォームについては、[26 ページの「ハードウェア要件」](#)を参照してください。

このリリースの Directory Server Enterprise Edition でサポートされているオペレーティングシステムと OS バージョンについては、[27 ページの「オペレーティングシステムの要件」](#)を参照してください。

Directory Server の変更点

Directory Server インスタンスの管理に利用されてきた、従来のコマンド行ツールが非推奨となっています。

次のツールは将来のリリースから削除される可能性があります。

- bak2db
- db2bak
- db2ldif
- ldif2db
- restart-slapd
- start-slapd
- stop-slapd

これらのツールによって提供されていた機能は、新しいコマンド行ツールの `dsadm` および `dsconf` や、その他のコマンドによって置き換えられます。詳細は、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide](#)』の「[Command Line Changes](#)」を参照してください。

管理に関連する Directory Server の変更点の詳細については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide](#)』の第 5 章「[Architectural Changes in Directory Server](#)」を参照してください。

レプリケートされたサーバトポロジを移行する前に、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide](#)』の第 4 章「[Migrating a Replicated Topology](#)」を確認してください。Directory Server 4 を使用した旧バージョンのレプリケーションのサポートは、このリリースから削除されました。Sun Microsystems は、Directory Server 4 のサポートを 2004 年 1 月に終了しました。

注 - Directory Server 5 の各バージョンからの移行はサポートされていません。Directory Server 5 のインストールを 6.0、6.1、6.2、または 6.3 に移行してから、[34 ページの「インストール手順」](#)の説明に従って 6.3.1 にアップグレードすることができます。

Directory Server インスタンスを作成するとき、パスワードポリシーは初期状態で下位互換に設定されます。アップグレード後、より柔軟できめ細やかなパスワードポリシー構成を可能にするために、互換性モードを変更します。ポリシー変換は Directory Server によって管理されます。下位互換のパスワードポリシー設定は、将来のリリースで削除される可能性があります。

また、Directory Server インスタンスを作成する場合、DN 変更操作のサポートは無効になっています。レプリケーショントポロジ内のすべてのサーバーインスタンスをアップグレードしたあと、DN 変更操作を正常にレプリケートできます。その時点

で、各サーバーインスタンスで DN 変更操作のサポートを有効にすることができます。この目的には、`dsconf set-server-prop moddn-enabled:on` コマンドを使用します。

Directory Server 連鎖は非推奨になっており、将来のリリースでは削除される可能性があります。連鎖は Directory Service Control Center では設定できず、また新しいコマンド行ツールでも設定できません。連鎖によって有効になる配備の大部分は現在、Directory Proxy Server の機能を使用して有効になります。たとえば、データ配布、レプリケーショントポロジ全体にわたるグローバルアカウントのロックアウト、およびディレクトリ情報ツリーのマージは、Directory Proxy Server を使用して実行できます。連鎖に引き続き依存している従来のアプリケーションの場合は、`ldapmodify` コマンドを使用して連鎖サフィックスプラグインを設定することにより、連鎖の属性を設定できます。これらの属性は、`dse.ldif(4)` に一覧表示されています。

『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Developer's Guide』の第2章「Changes to the Plug-In API Since Directory Server 5.2」および『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Developer's Guide』の第3章「Changes to the Plug-In API From Directory Server 4 to Directory Server 5.2」では、プラグイン API の変更点について詳しく説明しています。これらの参照先で非推奨であることが示されているインタフェースは、将来のリリースで削除される可能性があります。

Directory Proxy Server の変更点

Directory Proxy Server 6.3.1 のコマンドを使用して Directory Proxy Server 6.0、6.1、6.2、および 6.3 のインスタンスにアクセスする場合は、移行は必要ありません。Directory Proxy Server 6.3.1 のコマンドを使用する前に、Directory Proxy Server 5.x のインスタンスをすべて移行する必要があります。詳細は、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide』の第6章「Migrating Directory Proxy Server」を参照してください。

Identity Synchronization for Windows の変更点

Identity Synchronization for Windows に対する Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の変更はありません。必要な情報については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Release Notes』を参照してください。

Identity Synchronization for Windows 製品はバージョン 6.0 のままです。

注 - 仮想化環境への Identity Synchronization for Windows のインストールはサポートされていません。

Identity Synchronization for Windows の将来のリリースでは、Microsoft Windows NT のすべてのバージョンおよび Service Pack のサポートが廃止される可能性があります。Microsoft は Windows NT のサポートを 2004 年 6 月で終了しています。

Identity Synchronization for Windows にアップグレードする前に、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide](#)』の第 7 章「[Migrating Identity Synchronization for Windows](#)」をお読みください。

Directory Server Resource Kit の変更点

Directory Server Resource Kit に対する Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の変更はありません。詳細は、第 7 章「[Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点](#)」を参照してください。

LDAP ユーティリティーに関する Sun Solaris システムのマニュアルページは、Directory Server Enterprise Edition で提供されるバージョンの LDAP ユーティリティー `ldapsearch`、`ldapmodify`、`ldapdelete`、および `ldapadd` についての記述がありません。これらのコマンドは、Solaris システムで別々には提供されなくなり、代わりに将来のバージョンのオペレーティングシステムで提供されるコマンドに統合される可能性があります。LDAP クライアントツールのマニュアルページについては、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Man Page Reference](#)』を参照してください。

Directory Editor の変更点

Directory Editor に対する Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の変更点はありません。詳細は、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Release Notes](#)』を参照してください。

Directory Editor は将来のリリースで非推奨になる可能性があります。

第 6 章「[Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点](#)」で、このリリースの Directory Editor について詳しく説明しています。

ソフトウェアのサポート

次の Directory Server Enterprise Edition コンポーネントは、将来のリリースで非推奨となる可能性があります。

- Sun Cluster サポート用のエージェント
- Directory Editor

Sun Java Web Console (Lockhart) は、Directory Server Enterprise Edition 7 での DSCC コンソールの配備に関してサポート対象外となる予定です。

インストールの注意点

この章では Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアをダウンロードする場所と、主なインストール要件について示します。

この章では、次の内容について説明します。

- 24 ページの「サポートサービスとライセンス」
- 25 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の新機能」
- 25 ページの「ソフトウェアの入手」
- 26 ページの「ハードウェア要件」
- 27 ページの「オペレーティングシステムの要件」
- 30 ページの「ソフトウェア依存関係の要件」
- 32 ページの「インストールに必要な特権と資格」
- 34 ページの「インストール手順」
- 53 ページの「アンインストール手順」

Directory Server 製品ラインについての最新情報は、[Sun Directory Services blog \(http://blogs.sun.com/directoryservices/\)](http://blogs.sun.com/directoryservices/) を参照してください。



注意 - Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 を、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の ZIP 形式のインストールに適用する必要があります。手順については、52 ページの「[Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 のインストール](#)」を参照してください。



注意 - Sun Java System Directory Server 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 を、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 のインストールに適用する必要があります。手順については、52 ページの「[Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 のインストール](#)」を参照してください。

注 – Sun Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 パッチ 141958-01 は、Directory Proxy Server コンポーネントの問題を修正するために Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の上に適用するよう設計されています。詳細は、99 ページの「[Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1](#)」を参照してください。

サポートサービスとライセンス

製品のインストールを開始する前に、サポートとライセンスに関する情報を注意深くお読みください。

サポートサービス

Sun Java System Directory Server Enterprise Edition には、Sun Software Service Standard、Premium、および Premium Plus というプランが用意されています。これらは Sun の販売担当者、販売パートナー、またはオンライン (<http://www.sun.com/sales/index.jsp>) 経由で購入することができます。これらのサービスプランには、電話およびオンラインによる技術サポート、オンデマンドなソフトウェア更新、オンラインシステム管理リソース、サポート通知サービス、ワンストップの相互運用性支援 (Premium プランおよび Premium Plus プランのみ) が含まれています。さらに、Premium Plus プランではお客様中心のサポートチームが対応します。

提供されるすべての機能については、<http://www.oracle.com/support/premier/index.html> を参照してください。

Sun の提供するすべてのサービスプログラムを含むサービスリストには、次のサイトからアクセスできます。<http://www.sun.com/servicelist>

Directory Server Enterprise Edition で管理するエントリのライセンス

ライセンスは、Directory Server Enterprise Edition を使用して管理するエントリの数に基づいて提供されます。ライセンスが提供されたら、ディレクトリの実装によって最大限の柔軟性を得るために必要な回数だけエントリをレプリケートできます。唯一の条件は、レプリケートしたエントリを変更しないことと、レプリケート後のすべてのエントリを同じオペレーティングシステムに保存することです。レプリケートしたエントリを別のオペレーティングシステム上に保存した場合、それらのエントリについてライセンスを購入する必要があります。

Solaris のライセンスでは、以前、ディレクトリサーバー用に 200,000 のエントリが無償で提供されていました。この場合、ライセンスはコアディレクトリサーバーコンポーネントのみが対象で、その他の Directory Server Enterprise Edition コンポーネント

は対象ではありませんでした。今でも、コアディレクトリサーバーコンポーネントから完全な Directory Server Enterprise Edition へのアップグレードを購入できます。これらの 200,000 のディレクトリサーバー用のエントリのサポートを取得するために、Software Service Plan for Directory Server を購入する必要があります。Solaris Service Plan はこれらのエントリを対象としていません。

http://www.sun.com/software/products/directory_srvr_ee/get.jsp から製品をダウンロードする前に、指定したバージョンの最新のライセンスを確認できます。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の新機能

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 は、Directory Server Enterprise Edition リリース 6.0 から 6.3 で確認されている問題を修正するパッチリリースです。このリリースは、Directory Server Enterprise Edition リリース 6.0 から 6.3 に新しい機能を追加するものではありません。

ソフトウェアの入手

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 は、Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、または 6.3 の既存のインストールに適用される保守リリースです。Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、または 6.3 ソフトウェアは次の場所からダウンロードできます。

http://www.sun.com/software/products/directory_srvr_ee/get.jsp

このダウンロードページは、ダウンロードする必要のある配布の種類に応じて、適切なダウンロードに案内する開始点として機能します。Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 は、次の配布形態で入手できます。

- ネイティブパッケージ配布
- ZIP 形式の配布

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 は、次の形態で入手できます。

- ネイティブパッチ - Java ES インストーラを使用してインストールされた Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、および 6.3 ネイティブパッケージをアップグレードするパッチ。
- ZIP 形式の配布 - Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、および 6.3 の ZIP 形式インストールに対するパッチ。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 パッチは、[SunSolve \(http://sunsolve.sun.com\)](http://sunsolve.sun.com) から入手できます。パッチ番号については、34 ページの「インストール手順」を参照してください。

現在のインストールをもとに、インストールする必要のあるパッチを判断するには、34 ページの「インストール手順」を参照してください。

ハードウェア要件

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品のハードウェア要件を示します。

- 26 ページの「[Directory Server のハードウェア要件](#)」
- 26 ページの「[Directory Proxy Server のハードウェア要件](#)」

Directory Server のハードウェア要件

Directory Server ソフトウェアの動作には、次のハードウェアが必要です。

コンポーネント	プラットフォーム要件
RAM	1G～2G バイト (評価目的の場合) 最小 2G バイト (本稼働サーバーの場合)
ローカルディスク容量	<p>バイナリ用に 400M バイトのディスク容量。UNIX システムの場合、ネイティブパッケージからインストールされるバイナリはデフォルトで /opt に配置されます。評価目的の場合、サーバーソフトウェア用にさらに 2G バイトのローカルディスク容量を用意する必要があります。</p> <p>Directory Server を使用している場合、Directory Server に格納されるエントリがローカルディスク容量を使用することを考慮してください。Directory Server では、NFS マウントされたファイルシステム上にインストールされるログおよびデータベースはサポートされていません。ローカルファイルシステム上の /var/opt 内や /local 内などの領域に、データベースを収容するための十分な容量を確保する必要があります。一例として、最大で 250,000 個のエントリが存在し、写真などのバイナリ属性がない一般的な本稼働配備で、4G バイトがこの容量の目安となります。</p> <p>Directory Server は、ログファイル用に 1.2G バイトを超えるディスク容量を使用することがあります。4G バイトという記憶容量はデータベースに対してのみで、ログは含まれていないことに注意する必要があります。</p> <p>Directory Server は、SAN ディスク記憶装置をサポートしています。SAN ディスクを使用する前に、ディスクのレイアウトや設計を理解しておく必要があります。1 つのディスクから多数のアプリケーションが同時にデータアクセスした場合、システムの書き込みパフォーマンスに影響が出るからです。</p>

Directory Proxy Server のハードウェア要件

Directory Proxy Server ソフトウェアの動作には、次のハードウェアが必要です。

コンポーネント	プラットフォーム要件
RAM	1G～2G バイト (評価目的の場合) 最小 2G バイト (本稼働サーバーの場合)
ローカルディスク容量	バイナリ用に 400M バイトのディスク容量。UNIX システムの場合、ネイティブパッケージからインストールされるバイナリはデフォルトで /opt に配置されます。 評価目的の場合、デフォルト構成の使用時において、サーバーログを保持するための追加ローカルディスク容量を 1 サーバーインスタンスにつき 2G バイト確保する必要があります。 Directory Proxy Server では、NFS マウントされたファイルシステムへのインストールはサポートされていません。ローカルファイルシステム上の /var/opt 内や /local 内などの領域に、サーバーインスタンスとそのインスタンスによって使用されるすべてのファイルを収容できる十分な容量を確保する必要があります。

オペレーティングシステムの要件

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品をサポートするために必要なオペレーティングシステム、パッチ、およびサービスパックを示します。

Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit のオペレーティングシステム要件

Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit のオペレーティングシステム要件は共通です。Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアの動作確認は、ここに一覧されているオペレーティングシステムの「ベース」、「エンドユーザー」、または「コア」の限定インストールではなく、完全インストールを使用して実施しています。一部のオペレーティングシステムでは、次の表に示されている追加のサービスパックまたはパッチが必要な場合があります。

Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit でサポートされている OS バージョン	必要な追加ソフトウェアとコメント
Solaris 10 オペレーティングシステム (SPARC、32 ビット x86、Intel x64、および AMD x64 アーキテクチャ)	パッチ: <ul style="list-style-type: none"> ■ (SPARC) 127127 に加え、118833、119689、119963、122032、および 119254 または置換パッチ ■ (x86/x64) 127128 に加え、118855、119964、121208、122033、および 119255 または置換パッチ
Solaris 9 オペレーティングシステム (SPARC および x86 アーキテクチャ)	パッチ: <ul style="list-style-type: none"> ■ (SPARC) 112960-56 以降に加え、111711、111712、111722、112874、112963、113225、114344、114370、114371、114372、および 114373 または置換パッチ ■ (x86) 114242-41 以降に加え、111713、111728、113986、114345、114427、114428、114429、114430、114432、116545、および 117172 または代替パッチ
Red Hat Enterprise Linux Advanced Server AS および ES 3.0 Update 4 (x86 および AMD x64)	追加ソフトウェアは必要ありません。64 ビット Red Hat システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作しますが、Directory Proxy Server は 64 ビットモードで動作します。
Red Hat Enterprise Linux Advanced Server AS および ES 4.0 Update 2 (x86 および AMD x64)	次の互換性ライブラリを推奨: compat-gcc-32-3.2.3-47.3.i386.rpm compat-gcc-32-c++-3.2.3-47.3.i386.rpm 次の互換性ライブラリが必要: compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.rpm Red Hat を 64 ビットのシステム上で実行している場合でも、32 ビットのシステムライブラリがインストールされません。 これらの互換性ライブラリは、Red Hat のメディアまたは https://www.redhat.com/rhn/rhndetails/update/ から入手できます。 64 ビット Red Hat システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作しますが、Directory Proxy Server は 64 ビットモードで動作します。

Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit でサポートされている OS バージョン	必要な追加ソフトウェアとコメント
SuSE Linux Enterprise Server 10 (x86 および AMD x64)	Service Pack 1 Directory Server Enterprise Edition の ZIP 形式の配布でのみサポート。 64 ビット SuSE システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作しますが、Directory Proxy Server は 64 ビットモードで動作します。
SuSE Linux Enterprise Server 9 (x86 および AMD x64)	Service Pack 4 Directory Server Enterprise Edition の ZIP 形式の配布でのみサポート。 64 ビット SuSE システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作しますが、Directory Proxy Server は 64 ビットモードで動作します。
Microsoft Windows 2000 Server	Service Pack 4
Microsoft Windows 2000 Advanced Server	Service Pack 4
Microsoft Windows 2003 Server Standard Edition	Service Pack 2
Microsoft Windows 2003 Server Enterprise Edition	Service Pack 2
注 - Microsoft Windows 2008 は Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 でサポートされていません	
Hewlett Packard HP-UX 11iV2	(11.23) PA-RISC 64 ビット Directory Server Enterprise Edition の ZIP 形式の配布でのみサポート。

Microsoft Windows のすべてのサポートされているバージョンで、Directory Server と Directory Proxy Server は 32 ビットモードでのみ動作し、ファイルシステムタイプは NTFS である必要があります。

Solaris パッチクラスタを入手すると、ほとんどの個別パッチのダウンロードを回避できます。Solaris パッチクラスタを入手するには、次の手順に従います。

1. <http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patchpage> の SunSolve パッチページにアクセスします。

2. 「Recommended Patch Clusters」リンクをクリックします。
3. 使用する Solaris OS と Java ES バージョンに対応するパッチクラスタをダウンロードします。

SuSE Linux Enterprise Server にインストールするには、いくつかの Java 環境変数を再設定する必要があります。詳細は、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド](#)』を参照してください。

ソフトウェア依存関係の要件

Directory Server は暗号化アルゴリズムをネットワークセキュリティサービス (NSS) レイヤーに依存します。NSS は、Solaris 10 システム上で提供され、暗号化促進デバイスをサポートする Sun 暗号化フレームワークとの組み合わせで正しく機能することが確認されています。

Microsoft Windows システムでは、アカウントのアクティブ化や手動のスキーマレプリケーションのコマンドを使用するには、Directory Server に ActivePerl ソフトウェアが必要です。ActivePerl は Directory Server Enterprise Edition には付属しません。この依存関係は、次のコマンドに影響します。

- `ns-accountstatus(1M)`
- `ns-activate(1M)`
- `ns-inactivate(1M)`
- `schema_push(1M)`

Microsoft Windows システムでは、Directory Service Control Center が正しく動作するようにするために、ポップアップブロックを無効にする必要があります。

Directory Service Control Center は次のアプリケーションサーバーをサポートします。

- Sun Java System Application Server 8.2.
- Tomcat 5.5

詳細は、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド](#)』の「ZIP 形式の配布から Directory Service Control Center をインストールする」を参照してください。

Directory Proxy Server は、どの LDAPv3 準拠のディレクトリサーバーでも動作できませんが、Sun Java System Directory Server でしかテストされていません。

仮想化については、Directory Proxy Server は、次に示すドライバを使用して、次の JDBC データソースで検証されています。

JDBC データソース	JDBC ドライバ
DB2 v9	IBM DB2 JDBC Universal Driver Architecture 2.10.27
JavaDB 10.2.2.0	Apache Derby Network Client JDBC ドライバ 10.2.2.0
Microsoft SQL Server 2005	sqljdbc.jar 1.2.2323.101
MySQL 5.0	MySQL-AB JDBC ドライバ mysql-connector-java-5.0.4
Oracle 9i Database Oracle 10g Database	Oracle JDBC ドライバ 10.2.0.2.0

Microsoft Windows システムでは、MKS シェルから `dsee_deploy` コマンドを実行した場合、共通エージェントコンテナ (`cacao`) にソフトウェアを正しく登録できません。この問題は、MKS の `PATH` に `system-drive:\system32` フォルダが含まれていない場合に発生することがあります。別の方法として、Microsoft Windows のネイティブなコマンド行でコマンドを実行してください。

Solaris 10 では、`rc.scripts` が推奨されないため、`dsadm autostart` などのコマンドはサポートされていません。これらのタイプの要求を処理するには、代わりに Solaris 10 Service Management Facility (SMF) を使用します。たとえば、`dsadm enable-service` などです。SMF の詳細については、Solaris オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

コネクタの要件

すべてのコネクタが Message Queue と通信できる必要があります。

加えて、コネクタに関する次の要件が満たされている必要があります。

- Active Directory コネクタが、LDAP 経由 (ポート 389) または LDAPS 経由 (ポート 636) で Active Directory ドメインコントローラにアクセスできる必要があります。
- Directory Server コネクタが、LDAP 経由 (デフォルトポート 389) または LDAPS 経由 (デフォルトポート 636) で Directory Server インスタンスにアクセスできる必要があります。

ファイアウォール環境での Directory Server プラグインの要件

各 Directory Server プラグインが、Directory Server コネクタのサーバーポート (コネクタのインストール時に選択したもの) と通信できる必要があります。Directory Server マスターレプリカで動作するプラグインは、Active Directory の LDAP ポート (389) ま

たは LDAPS ポート (636) に接続できる必要があります。その他の Directory Server レプリカで動作するプラグインは、マスター Directory Server の LDAP ポートおよび LDAPS ポートと通信できる必要があります。

Directory Service Control Center でサポートされるブラウザ

次の表に、Directory Service Control Center をサポートするブラウザをオペレーティングシステムごとに示します。

オペレーティングシステム	サポートされるブラウザ
Solaris 10 および Solaris 9 (SPARC および x86)	Netscape Communicator 7.1、Mozilla 1.7.12、および Firefox 1.0.7、1.5、2.0
Red Hat Linux 4、Red Hat Linux 3、および SuSE Linux	Mozilla 1.7.12 および Firefox 1.0.7、1.5、2.0
Windows XP	Netscape Communicator 8.0.4、Microsoft Internet Explorer 6.0SP2、7.0、Mozilla 1.7.12、および Firefox 1.0.7、1.5、2.0
Windows 2000/2003	Netscape Communicator 8.0.4、Microsoft Internet Explorer 6.0 SP1、7.0、Mozilla 1.7.12、および Firefox 1.0.7、1.5、2.0

インストールに必要な特権と資格

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品のインストールに必要な特権および資格について説明します。

- [33 ページの「Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権」](#)

Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権

Java Enterprise System ネイティブパッケージ形式の配布から Directory Server、Directory Proxy Server、または Directory Service Control Center をインストールするには、次の特権が必要です。

- Solaris および Red Hat システムでは、root 特権でインストールを行う必要があります。
- Windows システムでは、Administrator 特権でインストールを行う必要があります。

ZIP 形式の配布から Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit をインストールする場合には、特別な特権は必要ありません。詳細は、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』を参照してください。

アップグレードの前に

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 のパッチを適用する前に、次の点を考慮する必要があります。

- ネイティブパッケージ形式の配布の場合。Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 のパッチを適用する前に、すべての Directory Server および Directory Proxy Server インスタンス (DSCC レジストリを含む) を停止する必要があります。

サーバーインスタンスを停止せずにパッチを適用すると、次回再起動時にインスタンスがクラッシュする可能性があります。

注 - Windows では、次の dsadm コマンドは DSCC レジストリの停止に失敗します。

```
dsadm.exe stop C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE\var\dsc6\dcc\ads
```

回避策として、タスクマネージャーを使用して bin_slapd.exe プロセスを強制終了し、Administrator としてログインします。これで、DSCC レジストリを正常に開始および停止できるようになります。DSCC レジストリの所有者は以前と同じで、SYSTEM です。

ネイティブパッケージ形式の配布の場合。パッチを適用して Directory Server Enterprise Edition をアップグレードしたあとは、次のコマンドを使用して Sun Web Console を再起動する必要があります。

```
# smcwebserver restart
```

ローカライズ版のコンソールを使用するには、Directory Server Enterprise Edition 6.3 コアパッチよりも先に Directory Server Enterprise Edition 6.3 ローカライズ版パッチを適用します(まだ適用していない場合)。6.3 ローカライズ版パッチを適用する前に 6.3.1 コアパッチを適用する場合は、次に示すコマンドを指定された順序で実行します。

```
# dscsetup console-unreg  
# dscsetup console-reg
```

詳細は、64 ページの「[Directory Server 6.3.1 の既知の問題点](#)」のバグ 6583131 を参照してください。

- ZIP 形式の配布の場合。Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の ZIP 形式の配布を次の適用可能な ZIP インストール環境の 1 つに適用する前に、すべての Directory Server および Directory Proxy Server インスタンスを停止する必要があります。
 - Directory Server Enterprise Edition 6.0
 - Directory Server Enterprise Edition 6.1
 - Directory Server Enterprise Edition 6.2
 - Directory Server Enterprise Edition 6.3

dsee_deploy コマンド自体によってこのチェックが行われますが、Microsoft Windows 2000 プラットフォーム上では実行されません。詳細は、64 ページの「[Directory Server 6.3.1 の既知の問題点](#)」の 6660462 を参照してください。

サーバーインスタンスを停止せずにパッチを適用すると、次回再起動時にインスタンスがクラッシュする可能性があります。

WAR ファイルを配備解除して再配備するまで、ZIP 形式のパッチの内容は Directory Service Control Center に適用されません。この要件は、64 ページの「[Directory Server 6.3.1 の既知の問題点](#)」のバグ 6583131 に関連しています。

インストール手順

注 - Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 は、Directory Service Control Center、Directory Proxy Server、および Directory Server のバグ修正を主に提供する保守リリースです。6.3.1 では、ネイティブパッケージまたは ZIP 形式の配布を使用したアップグレードモードのみが提供されます。

Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、または 6.3 をこれからインストールする場合は、各バージョンに対応した『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition Installation Guide』を参照してください。8 ページの「[Directory Server Enterprise Edition ドキュメントセット](#)」を参照してください。

次のインストール手順では、Directory Server Enterprise Edition の Directory Service Control Center、Directory Proxy Server、Directory Server、Directory Server Resource Kit、および Identity Synchronization for Windows の各コンポーネントをインストールする手順をステップ形式で説明します。



注意 - Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 を、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の ZIP 形式のインストールに適用する必要があります。手順については、52 ページの「[Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 のインストール](#)」を参照してください。

注 - このガイドでは、ほかの Java Enterprise System (Java ES) 製品と組み合わせたインストールについては扱いません。Directory Server および Directory Service Control Center ソフトウェアをほかの Java ES ソフトウェアとともにインストールする場合は、<http://docs.sun.com/coll/1286.3> から入手できる Java ES ソフトウェアのインストール手順をお読みください。Microsoft Windows の場合は、[Java Enterprise System 5 for Microsoft Windows](#) の Java ES ソフトウェアのインストール手順をお読みください。

この節では、次の内容を扱います。

- 43 ページの「ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」
- 49 ページの「ZIP 形式の配布を使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」

次の表は、Directory Server Enterprise Edition をバージョン 6.3.1 にアップグレードするために使用する情報を、現在のインストール構成および使用している配布形式ごとに示したものです。

表 2-1 Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス

Directory Server Enterprise Edition の以前のバージョン	ソフトウェアの配布形式	関連情報
なし	ネイティブパッケージ (Solaris および Linux)	<p>Sun Java Enterprise System 5 のコンポーネントである Directory Server Enterprise Edition 6.0 をインストールし、パッチを適用してバージョン 6.3.1 update 1 にアップグレードするには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』の「Software Installation」の説明に従って、Sun Java ES 5 の一部である Directory Server Enterprise Edition 6.0 をインストールします。2. 43 ページの「ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、バージョン 6.3.1 にアップグレードします。3. 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。4. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 をインストールします。

表 2-1 Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス (続き)

Directory Server Enterprise Edition の以前のバージョン	ソフトウェアの配布形式	関連情報
5.x	ネイティブパッケージ (Solaris および Linux)	<p>Sun Java Enterprise System 5 のコンポーネントである Directory Server Enterprise Edition 6.0 をインストールし、6.3 にアップグレードし、5.x インスタンスを 6.3 に移行し、パッチを適用して最新バージョンにアップグレードするには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』の「Software Installation」の説明に従って、Sun Java ES 5 の一部である Directory Server Enterprise Edition 6.0 をインストールします。 2. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ソフトウェアのインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition をバージョン 6.3 にアップグレードします。 3. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide』の説明に従って、すべての Directory Server 5.x インスタンスを 6.3 に移行します。 4. 43 ページの「ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、バージョン 6.3.1 にアップグレードします。 5. 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。 6. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 をインストールします。

表 2-1 Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス (続き)

Directory Server Enterprise Edition の以前のバージョン	ソフトウェアの配布形式	関連情報
なし	ネイティブパッケージ (Windows)	<p>Sun Java Enterprise System 5 の Directory Server Enterprise Edition 6.0 コンポーネントをインストールし、パッチを適用してバージョン 6.3.1 update 1 にアップグレードするには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『Sun Java Enterprise System 5 Installation Guide for Microsoft Windows』の説明に従って、Sun Java ES 5 の一部である Directory Server Enterprise Edition 6.0 をインストールします。 2. 43 ページの「ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、バージョン 6.3.1 にアップグレードします。 3. 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。 4. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ 143463-01 をインストールします。

表 2-1 Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス (続き)

Directory Server Enterprise Edition の以前のバージョン	ソフトウェアの配布形式	関連情報
5.x	ネイティブパッケージ (Windows)	<p>Sun Java Enterprise System 5 の Directory Server Enterprise Edition 6.0 コンポーネントをインストールし、バージョン 6.3 にアップグレードし、5.x インスタンスを 6.3 に移行し、パッチを適用して最新バージョンにアップグレードするには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『Sun Java Enterprise System 5 Installation Guide for Microsoft Windows』の説明に従って、Sun Java ES 5 の一部である Directory Server Enterprise Edition 6.0 をインストールします。 2. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ソフトウェアのインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition をバージョン 6.3 にアップグレードします。 3. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide』の説明に従って、すべての Directory Server 5.x インスタンスを 6.3 に移行します。 4. 43 ページの「ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、バージョン 6.3.1 にアップグレードします。 5. 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。 6. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 をインストールします。

表 2-1 Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス (続き)

Directory Server Enterprise Edition の以前のバージョン	ソフトウェアの配布形式	関連情報
なし	Zip	<p>Directory Server Enterprise Edition 6.3 をインストールし、6.3.1 に直接アップグレードし、6.3.1 update 1 パッチを適用するには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ZIP 形式の配布から Directory Server Enterprise Edition 6.3 をインストールする」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3 をインストールします。 2. 49 ページの「ZIP 形式の配布を使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、インストールを 6.3.1 にアップグレードします。 3. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ZIP 形式の配布から Directory Service Control Center をインストールする」の説明に従って、Directory Service Control Center をインストールします。 4. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ ZIP 142807-02 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ ZIP 142807-02 をインストールします。 5. 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。 6. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ 143463-01 をインストールします。

表 2-1 Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス (続き)

Directory Server Enterprise Edition の以前のバージョン	ソフトウェアの配布形式	関連情報
5.x	Zip	<p>Directory Server Enterprise Edition 6.3 をインストールし、5.x インスタンスを 6.3 に移行し、6.3.1 にアップグレードし、6.3.1 update 1 パッチを適用するには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ZIP 形式の配布から Directory Server Enterprise Edition 6.3 をインストールする」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3 をインストールします。 2. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide』の説明に従って、すべての Directory Server 5.x インスタンスを 6.3 に移行します。 3. 49 ページの「ZIP 形式の配布を使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、インストールを 6.3.1 にアップグレードします。 4. 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ZIP 形式の配布から Directory Service Control Center をインストールする」の説明に従って、Directory Service Control Center をインストールします。 5. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ ZIP 142807-02 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ ZIP 142807-02 をインストールします。 6. 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。 7. 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティパッチ 143463-01 をインストールします。

表 2-1 Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス (続き)

Directory Server Enterprise Edition の以前のバージョン	ソフトウェアの配布形式	関連情報
6.0、6.1、6.2 または 6.3	Native	<p>インストールを 6.3.1 にアップグレードし、6.3.1 update 1 パッチを適用するには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 43 ページの「ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、インストールを 6.3.1 にアップグレードします。 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 をインストールします。
6.0、6.1、6.2 または 6.3	ZIP	<p>インストールを 6.3.1 にアップグレードし、6.3.1 update 1 パッチを適用し、(まだインストールされていない場合に) Directory Service Control Center をインストールするには、次の手順を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 49 ページの「ZIP 形式の配布を使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の説明に従って、インストールを 6.3.1 にアップグレードします。 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 をインストールします。 110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」の説明に従って、Directory Proxy Server 6.3.1 update 1 パッチ 141958-01 をインストールします。 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ZIP 形式の配布から Directory Service Control Center をインストールする」の説明に従って、Directory Service Control Center をインストールします。 52 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 のインストール」の説明に従って、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 をインストールします。

注—一般的には、ディレクトリデータベースを定期的に、特にディレクトリサーバーをアップグレードする前にバックアップすることをお勧めします。データベースのバックアップについては、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド](#)』を参照してください。

ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする

- ▼ **パッチを使用して共有コンポーネントをアップグレードするには**
 始める前に ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする前に、共有コンポーネントをアップグレードする必要があります。この手順は、Solaris および Red Hat システムでは root ユーザー、Windows システムでは Administrator ユーザーとして実行する必要があります。

Solaris、Linux、および Windows 上で、パッチを使用して共有コンポーネントをアップグレードできます。Linux では、installpatch を使用してパッチをインストールする必要があります。installpatch スクリプトはパッチに付属しています。

必要に応じてプラットフォームを選択し、そのプラットフォーム用として指定されたすべてのパッチをインストールします。より新しいバージョンのパッチが公開されている場合は、表に示されているものではなく新しいほうのパッチを使用します。

説明	Solaris 10 SPARC および Solaris 9 SPARC	Solaris 10 x86、AMD x64、および Solaris 9 x86	Linux
International Components for Unicode (ICU)	119810-05 (Solaris 10) 114677-15 (Solaris 9)	119811-05 (Solaris 10) 114678-15 (Solaris 9)	126368-04
Sun Java Web Console (SJWC)	125952-05 (Solaris 10) 125950-05 (Solaris 9)	125953-05 (Solaris 10) 125951-05 (Solaris 9)	125954-05
ネットワークセキュリティ ティーツー ス/Netscape ポータブル ランタイム/Java Security Services (NSS/NSPR/JSS)	パッチの詳細は次の表 を参照してください。	パッチの詳細は次の表 を参照してください。	121656-17
Java Dynamic Management Kit ランタイム	119044-03	119044-03	119046-03

説明	Solaris 10 SPARC および Solaris 9 SPARC	Solaris 10 x86、AMD x64、および Solaris 9 x86	Linux
共通エージェントコンテナランタイム	123893-04	123896-04	123899-03
Sun Java Monitoring Framework (MFWK)	125444-11	125446-11 (Solaris 10 64 ビットおよび Solaris 10 32 ビット) 125445-11 (Solaris 10 32 ビットおよび Solaris 9 32 ビット)	125447-11
Sun LDAP C SDK 6.0	136798-01	136799-01 (Solaris 9 x86) 136800-01 (Solaris 10 x86 および AMD64)	139535-01

システム上で SUNWpr および SUNWtls のパッケージバージョンを確認し、そのシステムに対応した適切な NSS/NSPR/JSS パッチを選択します。

```
# pkginfo -l SUNWpr | grep VERSION
# pkginfo -l SUNWtls | grep VERSION
```

次の表から適切なパッチ系列を選択します。

Solaris	パッケージバージョン	ネットワークセキュリティサービス/Netscape ポータブルランタイム/Java Security Services (NSS/NSPR/JSS) パッチ
Solaris 9 SPARC	SUNWpr: VERSION=4.1.2,REV=2002.09.03.00.17 SUNWtls: VERSION=3.3.2,REV=2002.09.18.12.49	119211-17
Solaris 9 x86	SUNWpr: VERSION=4.1.3,REV=2003.01.09.13.59 SUNWtls: VERSION=3.3.3,REV=2003.01.09.17.07	119212-17
Solaris 10 SPARC	SUNWpr: VERSION=4.5.1,REV=2004.11.05.02.30 SUNWtls: VERSION=3.9.5,REV=2005.01.14.17.27	119213-17
Solaris 10 x86	SUNWpr: VERSION=4.5.1,REV=2004.11.05.03.44 SUNWtls: VERSION=3.9.5,REV=2005.01.14.19.03	119214-17

Solaris	パッケージバージョン	ネットワークセキュリティサービス/Netscape ポータブルランタイム/Java Security Services (NSS/NSPR/JSS) パッチ
Solaris 9 SPARC および Solaris 10 SPARC	SUNWpr: VERSION=4.6.4,REV=2006.11.16.20.40 SUNWtls: VERSION=3.11.4,REV=2006.11.16.20.40	125358-06
Solaris 9 x86 および Solaris 10 x86	SUNWpr: VERSION=4.6.4,REV=2006.11.16.21.41 SUNWtls: VERSION=3.11.4,REV=2006.11.16.21.41	125359-06

次の表に、Windows プラットフォーム用の共有コンポーネントパッチの一覧を示します。

説明	Windows
Windows インストーラのパッチ	126910-02
Sun Java Web Console (SJWC)	125955-05
ネットワークセキュリティサービス/Netscape ポータブルランタイム/Java Security Services (NSS/NSPR/JSS)	125923-06
共通エージェントコンテナランタイム	126183-07
Sun Java Monitoring Framework (MFWK)	125449-09

Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、または 6.3 を 6.3.1 にアップグレードする前に、共有コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 1 対象の共有コンポーネントを使用しているすべてのプロセスを終了します。
- 2 対象の共有コンポーネントが実行中であれば終了します。
- 3 前の表に示された最新のアップグレードパッチを入手します。
パッチの入手方法については、25 ページの「ソフトウェアの入手」を参照してください。
- 4 対象の共有コンポーネント用の適切なパッチを適用します。
パッチの詳細なインストール手順については、README.patchID ファイルをお読みください。

- 5 パッチのアップグレードが成功したことを確認します。
確認手順については、README.patchID ファイルをお読みください。
- 6 停止した共有コンポーネントを再起動します。
- 7 **Windows** で共通エージェントコンテナの共有コンポーネントをアップグレードするには、示されているとおりの順序で次のコマンドを実行します。

```
# cacaoadm prepare-uninstall
# 126183-04.exe
# cacao-install-path\share\cacao_2\configure.bat
# cacao-install-path\share\cacao_2\bin\cacaoadm rebuild-dependencies
```

- 8 インストールで **Identity Synchronization for Windows** を使用しており、システム上で最新の **NSS パッチ 3.12** を適用済みの場合、次の例に示すように、**NSS パッチ 3.12** で提供される新しいライブラリへのシンボリックリンクを設定します。SERVER_ROOT パス名のデフォルト値は /var/mps/serverroot です。

```
$ cd /var/mps/serverroot/lib
$ ln -s /usr/lib/mps/secv1/libnssdbm3.so libnssdbm3.so
$ ln -s /usr/lib/mps/secv1/libnssutil3.so libnssutil3.so
$ ln -s /usr/lib/mps/secv1/libsqlite3.so libsqlite3.so

$ cd /var/mps/serverroot/lib/sparcv9
$ ln -s /usr/lib/mps/secv1/sparcv9/libnssdbm3.so libnssdbm3.so
$ ln -s /usr/lib/mps/secv1/sparcv9/libnssutil3.so libnssutil3.so
$ ln -s /usr/lib/mps/secv1/sparcv9/libsqlite3.so libsqlite3.so
```

▼ ネイティブパッケージを使用して **Directory Server Enterprise Edition** をアップグレードするには

始める前に

すべての共有コンポーネントが最新であることを確認します。詳細は、[43 ページ](#) の「[パッチを使用して共有コンポーネントをアップグレードするには](#)」を参照してください。

Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、または 6.3 がすでにインストールされている場合、次の手順を使用して 6.3.1 にアップグレードします。

これらの手順は、Solaris および Red Hat システムでは root ユーザー、Windows システムでは Administrator ユーザーとして実行する必要があります。

Directory Server Enterprise Edition のアップグレードが完了したあとも、すべての Directory Server インスタンス、Directory Proxy Server インスタンス、および設定情報は影響を受けません。

次の表に、各プラットフォームで Directory Server Enterprise Edition をアップグレードするために必要なパッチ番号を示します。より新しいバージョンのパッチが公開されている場合は、表に示されているものではなく新しいほうのパッチを使用します。

説明	Directory Server Enterprise Edition コア	Directory Server Enterprise Edition ローカライズ版
パッチ ID: Solaris SPARC	125276-08	125937-06
パッチ ID: Solaris 9 x86	125277-08	125938-06
パッチ ID: Solaris 10 x86 または AMD x64	125278-08	125938-06
パッチ ID: Linux	125309-08	125939-06
パッチ ID: Windows Windows 用の Directory Server Enterprise Edition 6.1 パッチは提供されていないため、このパッチを使用して 6.1 インストールをアップグレードすることはできません。	125311-08 ローカライズ版パッチはベースパッチの内部で提供されます。	

注 - ローカライズ版の Directory Server Enterprise Edition を正常に動作させるには、コアパッチをインストールする前にローカライズ版パッチをインストールします。

各ローカライズ版パッチには、選択したプラットフォームでサポートされているすべての言語が含まれています。

1 DSCC レジストリを停止します。

■ Solaris の場合

```
# dsadm stop /var/opt/SUNWdsee/dscc6/dcc/ads
```

■ Linux の場合

```
# dsadm stop /var/opt/sun/dscc6/dcc/ads
```

■ Windows では、次の dsadm コマンドは DSCC レジストリの停止に失敗します。

```
dsadm.exe stop C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE\var\dscc6\dcc\ads
```

回避策として、タスクマネージャーを使用して bin_slapd.exe プロセスを強制終了し、Administrator としてログインします。これで、DSCC レジストリを正常に開始および停止できるようになります。DSCC レジストリの所有者は以前と同じで、SYSTEM です。

2 Directory Server および Directory Proxy Server の動作中のインスタンスをすべて停止します。

3 共有コンポーネントをアップグレードします。43 ページの「パッチを使用して共有コンポーネントをアップグレードするには」を参照してください。

- 4 **Directory Server Enterprise Edition 6.3.1** パッチをダウンロードします。
詳細は、[25 ページの「ソフトウェアの入手」](#)を参照してください。
- 5 前の表の一覧に示されたパッチを保存したディレクトリに移動します。
- 6 次のコマンドを実行してパッチをインストールします。
 - Solaris OS
Directory Server Enterprise Edition をアップグレードする前に、Solaris 10 SPARC では 119254-38、Solaris 10 x86 では 119255-38 をそれぞれインストールする必要があります。パッチのダウンロードについては、[25 ページの「ソフトウェアの入手」](#)を参照してください。
Solaris 10 SPARC および Solaris 10 x86 では、別の方法として、Directory Server Enterprise Edition アップグレードパッチの適用中に patchadd コマンドの -G オプションを使用できます。たとえば、次のとおりです。

```
# patchadd -G patch-id
```

その他のバージョンの Solaris では、次のコマンドを使用します。

```
# patchadd patch-id
```
 - Linux
 - a. installpatch ファイルが置かれているディレクトリを開きます。
 - b. installpatch を実行します。

```
# ./installpatch
```
 - Windows
 - a. patch-id.exe 実行可能ファイルが置かれているフォルダを開きます。
 - b. patch-id.exe をダブルクリックします。
 - c. パッチのインストールが成功したあとに、次のコマンドを実行します。

```
# dscsetup console-unreg  
# dscsetup console-reg
```
- 7 **Directory Server** インスタンスおよび **Directory Proxy Server** インスタンス (存在する場合) を起動します。
- 8 **Web Console** および共通エージェントコンテナを起動します。
- 9 **DSCC** レジストリを再起動します。
 - Solaris の場合

```
# dsadm start /var/opt/SUNWdsee/dscc6/dcc/ads
```
 - Linux の場合

```
# dsadm start /var/opt/sun/dscc6/dcc/ads
```


- Windows の場合

```
dsadm.exe start C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE\var\dsc6\dcc\ads
```

ZIP 形式の配布を使用して **Directory Server Enterprise Edition** を **6.3.1** にアップグレードする

- ▼ ZIP 形式の配布を使用して **Directory Server Enterprise Edition** を **6.3.1** にアップグレードするには

始める前に



注意 - 以前の Directory Server Enterprise Edition インストールをあとから復元することはできないため、Directory Server Enterprise Edition インストールディレクトリが存在する場合、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 にアップグレードする前にバックアップします。

ZIP 形式の配布は root 以外のユーザーでもインストールできます。

dsee_deploy コマンドを実行し、以前のインストールが見つかると、自動的にそのインストールが更新されます。ただし、SuSE Linux 9 および HP-UX の場合は、Directory Server Enterprise Edition のインストールをアップグレードする前に、まずオペレーティングシステムを SuSE Linux 9 SP4 および HP-UX 11.23 にそれぞれアップグレードする必要があります。その後、次の手順を使用して Directory Server Enterprise Edition のインストールを 6.3.1 にアップグレードします。

- 1 **CACAO** を停止します。また、**Directory Server** および **Directory Proxy Server** の動作中のインスタンスのうち、パッチを適用する対象のインストールに関連しているものをすべて停止します。**WAR** ファイルと **DSCC** レジストリのホストであるアプリケーションサーバーも停止します。
- 2 アップグレードするシステムのホストが **SuSE Linux 9** または **HP-UX** の場合は、オペレーティングシステムをアップグレードします。
 - SuSE Linux 9 SP3 を SuSE Linux 9 SP4 にアップグレードします。

64 ビット版 SuSE では、pam-32bit-9-yyyyymmddhhmm.rpm が CACAO 起動のための前提条件であり、システムにまだインストールされていない場合はこの RPM をインストールする必要があります。
 - Directory Server Enterprise Edition 6.0 および 6.1 では HP-UX 11.11 しかサポートされないため、Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする前に、オペレーティングシステムを HP-UX 11.23 にアップグレードする必要があります。

オペレーティングシステムをアップグレードする方法、Directory Server Enterprise Edition がインストールされているパーティションを保持する方法、および最新のパッチバンドルの入手場所については、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

3 Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードします。

a. **Directory Server Enterprise Edition 6.3.1** の ZIP 形式の配布に含まれる `dsee_deploy` コマンドを使用します。このときのインストールパスと **CACAO** ポートは、**Directory Server Enterprise Edition 6.0**、**6.1**、**6.2**、または **6.3** の以前のインストールと同じです。`dsee_deploy` コマンドによって **CACAO** および **DSCC** レジストリが再起動されません。

i. このインストールに対応した ZIP 形式の配布を入手します。

使用するシステム用の適切な ZIP パッチについては、次の表を参照してください。より新しいバージョンのパッチが公開されている場合は、表に示されているものではなく新しいほうのパッチを使用します。

すべての多言語ファイルは、前に説明したパッチに含まれています。

オペレーティングシステム	パッチ番号
Solaris SPARC	126748-05
Solaris 9 x86	126749-05
Solaris 10 x86 および AMD x64	126750-05
Red Hat Linux	126751-05
SuSE Linux	126751-05
HP-UX	126752-05
Windows	126753-05

ii. [27 ページの「オペレーティングシステムの要件」](#) の説明に従って、対象のプラットフォームで前提条件となるパッチまたは **Service Pack** をインストールします。

iii. `dsee_deploy` コマンドが格納されている、ZIP 形式の配布内のディレクトリに移動します。

iv. その時点で `install_path` にインストールされている **Directory Server Enterprise Edition** のインストールを、`dsee_deploy(1M)` コマンドを使用してアップグレードします。

```
$ ./dsee_deploy install -i install-path options
```

Windows インストールでは、`dsee_deploy` コマンドが格納されている ZIP 形式の配布内のフォルダを参照し、次のコマンドを実行します。

```
dsee_deploy install -i install-path options
```

たとえば、次のコマンドは、以前に `/local` ディレクトリにインストールされた既存の Directory Server Enterprise Edition をアップグレードします(このディレクトリへの書き込みアクセス権があることが必要です)。

```
$ ./dsee_deploy install -i /local
```

`--no-inter` オプションを使用して、確認なしでライセンスを受け入れる非対話型モードでインストールすることもできます。非対話型モードはサイレントインストールで特に役立ちます。

インストール処理の間、WAR ファイルがシステム上に保存されます。この WAR ファイルには DSCC Web アプリケーションが含まれており、Web アプリケーションがアプリケーションサーバーに配備されると、Web コンソールからサーバーインスタンスにアクセスして管理できるようになります。機能はネイティブパッケージに含まれる DSCC と同様です。WAR ファイルについては、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド](#)』の「[ZIP 形式の配布から Directory Service Control Center をインストールする](#)」を参照してください。

インストール処理の間、多言語パッケージもインストールされます。

- v. 最新の `dsc.war` ファイルをアプリケーションサーバーに配備します。

手順については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド](#)』の「[ZIP 形式の配布から Directory Service Control Center をインストールする](#)」を参照してください。

- vi. Directory Server および Directory Proxy Server のインスタンスと、WAR ファイルを配備したアプリケーションサーバーを再起動します。

- 4 オペレーティングシステムと Directory Server Enterprise Edition の両方がアップグレードされたことを確認してから、デーモンを起動します。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリ ティーパッチ ZIP 142807-02 のインストール



注意 - Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 を、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の ZIP 形式のインストールに適用する必要があります。このパッチでは SASL 2.19.20090601 に加えて NSS 3.12.5 が提供されます。

注 - このパッチは 6.3.1 よりも前のバージョンの Directory Server Enterprise Edition には適用できません。バージョン 6.3.1 へのアップグレード手順については、表 2-1 を参照してください。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ ZIP 142807-02 をインストールするには、<http://sunsolve.sun.com> (<http://sunsolve.sun.com>) からパッチをダウンロードし、README ファイルに記載されたインストール手順に従います。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリ ティーパッチ 143463-01 のインストール



注意 - Sun Java System Directory Server 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 を、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 のインストールに適用する必要があります。

注 - このパッチは 6.3.1 よりも前のバージョンの Directory Server Enterprise Edition には適用できません。バージョン 6.3.1 へのアップグレード手順については、表 2-1 を参照してください。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 セキュリティーパッチ 143463-01 をインストールするには、<http://sunsolve.sun.com> (<http://sunsolve.sun.com>) からパッチをダウンロードし、README ファイルに記載されたインストール手順に従います。

このコマンドを実行し、応答が次のとおりであることを確認して、パッチ 143463-01 のインストールが成功したことを確認します。

```
./dsadm -V
[dsadm]
dsadm                : 6.3.1                B2008.1121.0156 ZIP
```

```
[slapd 64-bit]
Sun Microsystems, Inc.
Sun-Java(tm)-System-Directory/6.3.1_sec B2010.0201.1612 64-bit
ns-slapd          : 6.3.1          B2008.1121.0156 ZIP
Slapd Library    : 6.3.1_sec      B2010.0201.1612
Front-End Library: 6.3.1          B2008.1121.0156
```

アンインストール手順

Directory Server Enterprise Edition 6.0、6.1、6.2、または6.3をアンインストールする場合は、各バージョンに対応した『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition インストールガイド』の第3章「Directory Server Enterprise Edition のアンインストール」を参照してください。8ページの「[Directory Server Enterprise Edition ドキュメントセット](#)」を参照してください。

この節では、次の事項について説明します。

- 53ページの「ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 からダウングレードする」
- 56ページの「ZIP形式の配布を使用して Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 からダウングレードする」

ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 からダウングレードする

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 にアップグレードしたあとで、以前の Directory Server Enterprise Edition のインストールを復元することが必要になる場合があります。この節では、Directory Server Enterprise Edition のインストールをダウングレードする方法について詳しく説明します。

▼ ネイティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition をダウングレードするには

Directory Server Enterprise Edition をダウングレードすると、稼働中の状態のコピーから以前の Directory Server Enterprise Edition のインストールが復元されます。すべての設定情報は、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 にアップグレードする前の時点のまま保持されています。

- 1 動作中のすべてのサーバーインスタンスを停止します。
- 2 次のコマンドを実行してパッチを削除します。
ベースパッチを削除してシステムをクリーンアップする前に、ローカライズ版パッチを削除します。プラットフォーム別のパッチ ID については、43ページの「[ネ](#)

イティブパッケージを使用して Directory Server Enterprise Edition を 6.3.1 にアップグレードする」の、ネイティブパッケージを使用する場合のパッチ表を参照してください。

- Solaris

```
# patchrm patch-id
```

- Linux

Directory Server Enterprise Edition 6.3、6.2、6.1、または 6.0 の .rpm ファイルが格納されているディレクトリに移動し、次の表で指定されたすべての RPM ファイルに対して、次のコマンドを繰り返し実行します。対象となる RPM ファイルは、以前に存在していた Directory Server Enterprise Edition のインストールによって異なります。

ダウングレード後に、6.0、6.1、6.2、または 6.3 のすべての RPM ファイルが揃っていることを確認します。一部の RPM ファイルだけをダウングレードすると、インストールが破損します。

6.3 のローカライズ版 RPM ファイル	sun-ldap-console-gui-l10n-6.3-1.i386.rpm sun-ldap-console-gui-help-l10n-6.3-1.i386.rpm sun-ldap-proxy-client-l10n-6.3-1.i386.rpm sun-ldap-proxy-l10n-6.3-1.i386.rpm sun-ldap-directory-client-l10n-6.3-1.i386.rpm sun-ldap-directory-l10n-6.3-1.i386.rpm sun-ldap-shared-l10n-6.3-1.i386.rpm
6.3 のベース RPM ファイル	sun-ldap-console-gui-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-console-gui-help-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-console-agent-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-console-cli-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-console-common-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-proxy-man-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-proxy-client-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-proxy-config-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-proxy-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-directory-man-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-directory-client-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-directory-config-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-directory-dev-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-directory-6.3-7.i386.rpm sun-ldap-shared-6.3-7.i386.rpm

6.2 のローカライズ版 RPM ファイル	sun-ldap-console-gui-l10n-6.2-6.i386.rpm sun-ldap-console-gui-help-l10n-6.2-6.i386.rpm sun-ldap-proxy-client-l10n-6.2-6.i386.rpm sun-ldap-proxy-l10n-6.2-6.i386.rpm sun-ldap-directory-client-l10n-6.2-6.i386.rpm sun-ldap-directory-l10n-6.2-6.i386.rpm sun-ldap-shared-l10n-6.2-6.i386.rpm
6.2 のベース RPM ファイル	sun-ldap-console-gui-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-console-gui-help-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-console-agent-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-console-cli-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-proxy-man-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-proxy-client-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-proxy-config-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-proxy-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-directory-man-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-directory-client-6.2-4.i386.rpm sun-ldap-directory-config-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-directory-6.2-5.i386.rpm sun-ldap-shared-6.2-5.i386.rpm
6.1 のローカライズ版 RPM ファイル	sun-ldap-console-gui-l10n-6.1-3.i386.rpm sun-ldap-console-gui-help-l10n-6.1-3.i386.rpm sun-ldap-proxy-client-l10n-6.1-3.i386.rpm sun-ldap-proxy-l10n-6.1-3.i386.rpm sun-ldap-directory-client-l10n-6.1-3.i386.rpm sun-ldap-directory-l10n-6.1-3.i386.rpm sun-ldap-shared-l10n-6.1-3.i386.rpm
6.1 のベース RPM ファイル	sun-ldap-console-gui-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-console-gui-help-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-console-agent-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-console-cli-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-proxy-man-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-proxy-client-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-proxy-config-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-proxy-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-directory-man-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-directory-client-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-directory-config-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-directory-6.1-2.i386.rpm sun-ldap-shared-6.1-2.i386.rpm

- Windows

- a. `dscscsetup dismantle` コマンドを実行して DSCC を設定解除します。

- b. Uninstall_patch-id.bat ファイルをダブルクリックしてパッチを削除します。Uninstall_patch-id.bat ファイルは、パッチが保存されているフォルダに格納されています。
- c. 共通エージェントコンテナをダウングレードします。126183-04 パッチの README に記載されたアンインストール手順を参照してください。
 - a. cacaoadm prepare-uninstall コマンドを実行します。
 - b. Uninstall_126183-04.bat をダブルクリックしてパッチを削除します。

ZIP 形式の配布を使用して **Directory Server Enterprise Edition 6.3.1** からダウングレードする

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 のインストールは以前のバージョンにダウングレードできません。以前の Directory Server Enterprise Edition のバージョンに戻す必要がある場合は、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 にアップグレードする前に保存したバックアップコピーを復元します。

Directory Server Enterprise Edition を完全に削除するには、『Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド』の「ZIP 形式の配布からインストールしたソフトウェアを削除する」の節を参照してください。

Directory Server の修正されたバグと既知の問題点

この章では、Directory Server のリリース時に入手可能な製品固有の重要情報が含まれています。

この章では、次の内容について説明します。

- 57 ページの「[Directory Server 6.3.1 で修正されたバグ](#)」
- 61 ページの「[Directory Server の既知の問題点と制限事項](#)」

Directory Server 6.3.1 で修正されたバグ

この節では Directory Server の前回のリリースから修正されたバグの一覧を示します。

- 6344894 マルチドメイン Active Directory を Identity Synchronization for Windows と同期するとき、Active Directory のリフェラルが原因で、Directory Server 上で同期が失敗します。
- 6439482 ACI の問題により、エンドユーザーが正確な値を推測できる場合があります。
- 6490419 ldapsearch で、ワイルドカードを含むフィルタを使って整数型の属性を検索したときの結果が矛盾している場合があります。
- 6557125 Active Directory サーバーが利用不可のときに、Directory Server が Identity Synchronization for Windows プラグイン内でハングアップします。
- 6557128 期限切れのコネクタを介したログ記録時に、Directory Server が Identity Synchronization for Windows プラグイン内でクラッシュします。
- 6557499 Directory Server Enterprise Edition の配備後、正常に機能しないプロセスが作成されます。この問題は HP-UX 上の ZIP 形式の配布にのみ影響します。
- 6579286 Microsoft Windows システムで、dsrepair ツールが正しく機能しません。

- 6579820 Microsoft Windows システムで、replcheck ツールが正しく機能しません。
- 6586725 SSL を使用するレプリケーションでメモリーリークが発生する場合があります。
- 6593775 Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンで、DSCC コンソールの「サフィックス使用状態」タブを更新してもすべてのサフィックスが表示されません。
- 6626454 長い ACI を追加したときに Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンがクラッシュすることがあります。
- 6632250 長い複合検索フィルタを使用すると、検索パフォーマンスが低下します。
- 6634048 可逆パスワードプラグイン (des-plugin) を使用するとレプリケーションが壊れる場合があります。
- 6640464 Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンは、同じ DN を使用する複数の認証局証明書が証明書データベースに存在する状態をサポートしません。
- 6643813 多数のマスターを使用すると、レプリケーションを適正に監視できなくなります。
- 6645742 Directory Server Enterprise Edition 5.2 および Directory Server Enterprise Edition 6 の両方を含むレプリケーショントポロジでパスワードポリシーを有効にすると、レプリケーションが失敗する原因になります。
- 6650039 競合状態が原因で、レプリケーションセッションの終了時にクラッシュが発生することがあります。
- 6650749 一部の保守操作が原因で、サーバーの再起動時にデータベースの回復が発生することがあります。
- 6651645 パスワードポリシーで pwdReset を使用すると、プロキシ承認を経由するパスワード変更ができなくなります。
- 6663553 ACI 文字列内の引用符のあとに空白が入っていると、ACI 評価でエラーが発生することがあります。
- 6670977 DSCC コンソールで長い ACI を表示できない場合があります。
- 6675384 複合 CoS によってパフォーマンスが低下することがあります。
- 6680718 ログファイルのローテーション中に、必要なアクセス権限がないことが原因で Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンがハングアップします。

- 6683182 パスワードポリシーでサポートされるパスワード期限の上限が 315360000 秒 (10 年より少し短い) になり、以前の 2147483647 秒 (約 68 年) から短縮されました。
- 6683353 NSS ピンコードが 8 文字より長い場合に、Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンが起動しません。
- 6683818 候補値リストのエントリ数が 250 万を超えていることが原因で、サーバーがクラッシュすることがあります。
- 6683870 2 進構文の属性を DSCC を使用して編集すると、属性値が壊れます。
- 6685118 接続を開いたり閉じたりするときの競合状態により、Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンが connection_getIp_string 内でクラッシュすることがあります。
- 6686199 属性一意性プラグインが構成されているが有効でない場合に、Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンがクラッシュすることがあります。
- 6686632 ACI 評価における競合状態が原因で、ディレクトリサーバーがクラッシュすることがあります。
- 6687533 更新履歴ログのトリミングを実行中に保守操作が発生した場合、データベースパニックまたはクラッシュが発生することがあります。
- 6688454 パススルー認証が原因で ns-slapd を終了できません。
- 6688891 パスワードポリシーが互換性モードで動作しているとき、passwordStorageScheme の値にかかわらず、パスワード値が平文で auditlog に表示されます。
- 6689454 (データベースページ数が 30,000 を超える) サイズの大きな更新履歴ログが含まれるバックアップを復元すると、次のメッセージがログに記録されます。
- ```
DEBUG - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - libdb: Lock table is out of available locks
ERROR<8232> - Replication - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - Internal error
Truncate of changelog file failed, error 12 (Not enough space)
```
- 6698812 Solaris 10 AMD64 で Sun Cluster 3.2 の制御下にあるときに、Directory Server が起動に失敗します。
- 6700232 更新履歴ログのトリミングと、トリミングされたエントリに対する操作の間の競合状態が原因で、ディレクトリサーバーがハングアップすることがあります。
- 6704259 レプリケーショングループのサイズが 1 より大きい場合に、複製された操作の etime が誤って計算されます。
- 6704261 マルチパスインポートでインデックスのインポートが可能ですが、これは誤りです。

- 6705319 いったん有効になったリフェラルを DSCC を使用して無効にできません。
- 6706009 サブタイプ付きの属性を DSCC が正しく処理しません。
- 6707089 DNS 規則を含む ACI との競合状態が原因で DS がクラッシュします。
- 6707164 バックアップリストア後にレプリケーション変更履歴ログが空になり、メッセージは次のようになります。

INFORMATION - NSMMReplicationPlugin - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - replica\_reload\_ruv:

Warning: new data for replica does not match the data in the changelog. Recreating the changelog file. This could affect replication with replica's consumers in which case the consumers should be reinitialized.

- 6708615 インデックス処理の発生中にサーバーを停止すると Directory Server がクラッシュします。
- 6710024 Sun Cluster 3.2 の制御下にある間に Directory Server がクラッシュした場合、クラスターのフェイルオーバーは開始されますが、開始には4分以上かかります。
- 6711123 マスターの更新がまれである場合に、バックアップが急速に古くなる場合があります。
- 6717507 レプリケーション構成で、エントリを削除すると不正な VLV インデックスが作成されます。
- 6718308 データベース復元メッセージが DSCC とエラーログファイルの間で矛盾しています。
- 6726890 競合状態のとき、Directory Server Enterprise Edition 6.3 の更新履歴ログがトリミングされません。
- 6732563 競合状態のときにサフィックスを削除すると、データベースパニックエラーが発生することがあります。
- 6740791 パスワードポリシーが CoS を使用して割り当てられるときに、ディレクトリサーバーがメモリーを解放しない場合があります。
- 6750240 Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンで、des-plugin.so に署名がありません。
- 6754084 ZIP 形式の配布で提供される JRE が JRE 1.5.0\_12 ではなく、以前のリリースと同じ 1.5.0\_9 です。
- 6756826 データベースページの更新とフラッシュの間の競合状態が原因で、ディレクトリサーバーのクラッシュ、データベースパニックエラー、または更新の喪失が発生することがあります。
- 6759200 接続時の SASL バインドが原因でディレクトリサーバーがクラッシュすることがあります。

6772870 ds-polling-thread-count が 1 よりも大きい (CMT マシン上で発生しやすい状況です) ときにコンシューマの同期が失われる可能性があります。

## Directory Server の既知の問題点と制限事項

以降の節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

- 61 ページの「Directory Server の制限事項」
- 64 ページの「Directory Server 6.3.1 の既知の問題点」

## Directory Server の制限事項

ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点

インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。製品ドキュメントの指示に従う場合、または Sun サポートの指示に従う場合のみ、ファイルのアクセス権を変更してください。

この制限事項に対処するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品のインストールおよびサーバーインスタンスの作成を行います。

cn=changelog サフィックスをレプリケートした場合の問題点

cn=changelog サフィックスのレプリケーションを設定することは可能ですが、実際に設定するとレプリケーションに干渉する可能性があります。cn=changelog サフィックスをレプリケートしないでください。cn=changelog サフィックスは、旧バージョン形式の更新履歴ログのプラグインによって作成されます。

Sun Cluster 上でのフェイルオーバー後にデータベースキャッシュが古くなっている場合がある

Directory Server は Sun Cluster 3.2 をサポートします。Directory Server を Sun Cluster 上で実行し、共有でないディレクトリを使用するように nsslapd-db-home-directory が設定されているとき、複数のインスタンスがデータベースキャッシュファイルを共有します。フェイルオーバー後、新しいノード上の Directory Server インスタンスは、その古くなっている可能性があるデータベースキャッシュファイルを使用します。

この制限に対処するには、共有ディレクトリを nsslapd-db-home-directory として使用するか、または nsslapd-db-home-directory 配下のファイルを Directory Server の起動時にシステムによって削除します。

LD\_LIBRARY\_PATH に /usr/lib が含まれる場合に誤った SASL ライブラリがロードされる

LD\_LIBRARY\_PATH に /usr/lib が含まれている場合に、誤った SASL ライブラリが使用され、インストール後に dsadm コマンドが失敗する原因となります。

cn=config 属性の変更には LDAP の置換操作を使用する

cn=config に対する LDAP の変更操作では、置換サブ操作のみを使用できます。属性を追加または削除しようとする、操作は拒否され、エラー 53 (DSA is unwilling to perform) が返されます。Directory Server 5 では、属性または属性値の追加または削除が可能でしたが、値の検証を経ることなく dse.ldif ファイルに更新が適用され、DSA の内部状態は DSA を停止して再開するまで更新されませんでした。

---

注 - cn=config 設定インタフェースは非推奨となっています。可能な場合は、代わりに dsconf コマンドを使用してください。

---

この制限への対処として、追加または削除サブ操作の代わりに、LDAP の変更操作の置換サブ操作を代用することができます。機能面での支障は発生しません。また、変更後の DSA 設定の状態が予想しやすくなります。

Windows システムで Directory Server が Start TLS 操作をデフォルトで許可しない

この問題点は、Windows システム上のサーバーインスタンスのみに影響します。この問題の原因は、Start TLS 操作を使用するときの Windows システム上のパフォーマンスです。

この問題に対処するには、dsconf コマンドで -P オプションを指定し、SSL ポートを直接使用して接続することを検討してください。別の方法として、ネットワーク接続がすでにセキュリティー保護されている場合は、dsconf コマンドの -e オプションの使用を検討してください。このオプションにより、セキュリティー保護された接続を要求せずに標準ポートに接続できます。

存在しないサーバーをレプリケーション更新ベクトルが参照する可能性がある

レプリケートした Directory Server インスタンスをレプリケーショントポロジから削除したあとも、レプリケーション更新ベクトルがそのインスタンスへの参照を維持し続けることがあります。結果として、存在しなくなったインスタンスへのリフェラルが発生する可能性があります。

共通エージェントコンテナがブート時に開始しない

この問題点に対処するには、ネイティブパッケージからのインストール時に root 権限で cacaoadm enable コマンドを使用してください。

Windows 上でこの問題点に対処するには、共通エージェントコンテナサービスのプロパティから「ログオン」を選択し、サービスを実行するユーザーのパスワードを入力し、「適用」を押します。まだこの設定を行っていない場合は、アカウント user name に「サービスとしてログオン」権利が付与されていることを示すメッセージが表示されます。



max-thread-per-connection-count が Windows システムで正しく機能しない  
Directory Server の構成プロパティ max-thread-per-connection-count は Windows システムには適用されません。

Microsoft Windows のバグによりサービスのスタートアップの種類が無効と表示される

Microsoft Windows 2000 Standard Edition のバグ (<http://support.microsoft.com/kb/287516/en-us>) が原因で、Directory Server サービスを Microsoft 管理コンソールから削除したあとにそのサービスが無効と表示されます。

Windows XP 上で、Administrator アカウントで、コンソールにログインできない  
Windows XP 上で実行しているコンソールに Administrator アカウントでログインできません。

この問題に対処するには、ゲストアカウントを無効にして、レジストリキー HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\Lsa\ForceGuest を 0 に設定してください。

オンザフライでインデックス構成を変更する  
ある属性のインデックス構成を変更すると、フィルタとしてその属性を含むすべての検索は、インデックスが生成されていないものとして処理されます。この属性を含む検索を正しく処理するには、dsadm reindex または dsconf reindex コマンドを使用して、属性のインデックス構成を変更するたびに既存のインデックスを再生成します。詳細は、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド』の第 13 章「Directory Server のインデックス」を参照してください。

ディレクトリマネージャーのパスワードに空白文字が含まれている場合に、コンソールで Directory Server または Directory Proxy Server インスタンスを作成できない(6830908)

ディレクトリマネージャーのパスワードに空白文字が含まれている場合、そのディレクトリマネージャーアカウントでは、コンソールを使用して Directory Server または Directory Proxy Server インスタンスを作成できません。

同じ問題が原因で、パスワードファイルに空白文字が含まれている場合にコマンド dsccsetup ads-create -w password-file が失敗します。

DSEE6.0 パッチの ZIP 形式の配布が SMF をサポートしない (6886089)

DSEE 6.0 以降のリリースの ZIP 形式の配布からインストールされたインスタンスで、dsadm および dpadm コマンドがサービス管理機能 (SMF) をサポートしません。インスタンスを SMF に手動で登録する場合、そのインスタンスは SMF によって制御されるため、dsadm または dpadm コマンドによって、あるいは DSCC からインスタンスが停止されると、SMF はそのインスタンスを再起動します。

SMF 機能は、DSEE 6.0 以降のリリースのネイティブ配布でのみ完全にサポートされます。

## Directory Server 6.3.1 の既知の問題点

この節では、Directory Server 6.3.1 のリリース時に判明していた既知の問題点の一覧を示します。

- 2113177      オンラインでのエクスポート、バックアップ、復元、またはインデックス生成の実行中にサーバーを停止したときに Directory Server がクラッシュする現象が確認されています。
- 2129151      `stop-slapd` コマンドを実行すると、Directory Server がハングアップします。
- 2133169      Directory Server で LDIF からエントリをインポートするときに、`createTimeStamp` および `modifyTimeStamp` 属性が生成されません。
- LDIF インポートは高速化のために最適化されています。そのため、インポート処理ではこれらの属性を生成しません。この制限に対処するには、エントリをインポートする代わりに追加してください。インポートを実行する前に LDIF を前処理して属性を追加する対処策もあります。
- 2151022      ローカライズされた名前が証明書に含まれている場合に、証明書を正しく削除できません。また、そのような証明書を正しく一覧表示できません。
- 4979319      Directory Server の一部のエラーメッセージで、実際には存在しないデータベースエラーガイドに言及しています。クリティカルなエラーメッセージの意味が理解できず、そのメッセージについての記述がドキュメントに存在しない場合は、Sun サポートまでお問い合わせください。
- 6358392      ソフトウェアを削除するとき、`dsee_deploy uninstall` コマンドが既存のサーバーインスタンスを停止または削除しません。
- この制限に対処するには、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 インストールガイド](#)』の指示に従います。
- 6401484      送信先サフィックスに対して SSL クライアント認証を使用するとき、`dsconf accord-repl-agmt` コマンドがレプリケーションアグリメントの認証プロパティを整合できません。



この問題点に対処するには、次の手順に従って、サプライヤの証明書をコンシューマ上の設定に格納します。ここで示すコマンド例は、2つのインスタンスが同じホスト上にあることを前提としています。

1. 証明書をファイルにエクスポートします。

次の例は、`/local/supplier` および `/local/consumer` に位置するサーバーを対象にエクスポートを実行する方法を示しています。

```
$ dsadm show-cert -F der -o /tmp/supplier-cert.txt /local/supplier defaultCert
$ dsadm show-cert -F der -o /tmp/consumer-cert.txt /local/consumer defaultCert
```

2. クライアントとサプライヤの証明書を交換します。

次の例は、`/local/supplier` および `/local/consumer` に位置するサーバーを対象に交換を実行する方法を示しています。

```
$ dsadm add-cert --ca /local/consumer supplierCert /tmp/supplier-cert.txt
$ dsadm add-cert --ca /local/supplier consumerCert /tmp/consumer-cert.txt
```

3. コンシューマ上で SSL クライアントエントリを追加します。 `usercertificate;binary` 属性に `supplierCert` 証明書を指定し、適切な `subjectDN` を指定します。
4. コンシューマ上でレプリケーションマネージャー DN を追加します。

```
$ dsconf set-suffix-prop suffix-dn repl-manager-bind-dn:entryDN
```

5. `/local/consumer/alias/certmap.conf` 内のルールを更新します。
6. `dsadm start` コマンドで両方のサーバーを再起動します。

6410741 Directory Service Control Center では、値を文字列としてソートします。そのため、Directory Service Control Center で数字をソートすると、それらの数字は文字列であるかのようにソートされます。

0、20、および 100 を昇順にソートすると、0、100、20 というリストが得られます。0、20、および 100 を降順にソートすると、20、100、0 というリストが得られます。

6412131 複数バイト文字を含む証明書名は、`dsadm show-cert instance-path valid-multibyte-cert-name` コマンドの出力ではドットとして示されます。

6416407 エスケープした引用符またはシングルエスケープしたコンマを含む ACI ターゲット DN を Directory Server が正しく解析しません。次の例に示す変更は構文エラーとなります。

```

dn:o=mary\red\doe,o=example.com
changetype:modify
add:aci
aci:(target="ldap:///o=mary\red\doe,o=example.com")
 (targetattr="*)(version 3.0; acl "testQuotes";
 allow (all) userdn ="ldap://self";)

dn:o=Example Company\, Inc.,dc=example,dc=com
changetype:modify
add:aci
aci:(target="ldap:///o=Example Company\, Inc.,dc=example,dc=com")
 (targetattr="*)(version 3.0; acl "testComma";
 allow (all) userdn ="ldap://self";)

```

ただし、エスケープしたコンマが2つ以上含まれる例は、正しく解析されることが確認されています。

- 6428448 dpconf コマンドを対話型モードで使用するときに、「「cn=Directory Manager」のパスワードを入力:」プロンプトが2回表示される現象が確認されています。
- 6446318 Windows で、SASL 認証が次の2つの理由で失敗します。
- SASL 暗号化が使用されている。
- SASL 暗号化によって生じる問題に対処するには、サーバーを停止し、`dse.ldif` を編集し、次のように SASL をリセットします。
- ```

dn: cn=SASL, cn=security, cn=config
  dssaslminssf: 0
  dssaslmaxssf: 0

```
- ネイティブパッケージを使用してインストールが実行された。
- ネイティブパッケージのインストールによって生じる問題に対処するには、`SASL_PATH` を `install-dir\share\lib` に設定します。
- 6449828 Directory Service Control Center では、`userCertificate` バイナリ値が正しく表示されません。
- 6461602 ソースが削除記録 (tombstone) の場合、およびターゲットがエントリ (レプリケートされない DEL) の場合、`dsrepair fix-entry` が機能しません。
- 回避方法: `dsrepair delete-entry` コマンドを使用して、エントリを明示的に削除します。その後、`dsrepair add-entry` コマンドを使用して削除記録 (tombstone) を追加します。
- 6468074 設定属性 `passwordRootdnMayBypassModsCheck` を有効に設定したときに、別のユーザーのパスワードを変更するときのパスワード構

- 文チェックをすべての管理者が回避できるようにサーバーの動作が変更されましたが、この属性の名前からはこのことがはっきりわかりません。
- 6469154 Windows では、`dsadm` および `dpadm` コマンドによる出力とヘルプメッセージが、簡体字中国語および繁体字中国語にローカライズされていません。
- 6469296 Directory Service Control Center では既存のサーバーの設定をコピーできますが、プラグイン設定をコピーすることはできません。
- 6469688 Windows システムで、LDIF ファイル名に2バイト文字が含まれる LDIF を `dsconf` コマンドでインポートしようとしたときに、インポートが失敗する現象が確認されています。
- この問題点に対処するには、2バイト文字が含まれないように LDIF ファイル名を変更します。
- 6478568 `dsadm enable-service` コマンドが Sun Cluster に対して正しく機能しません。
- 6480753 Monitoring Framework コンポーネントを共通エージェントコンテナに登録している間に `dsee_deploy` コマンドがハングアップする現象が確認されています。
- 6482378 ルート DSE 上でサポートされている SSLCiphers 属性が、サーバーで実際にサポートされていない無効な暗号化方式を列挙します。
- 6483290 Directory Service Control Center と `dsconf` コマンドのどちらを使用しても、無効なプラグイン署名を Directory Server が処理する方法を設定できません。デフォルトの動作では、プラグインの署名の検証は行われますが、署名が有効であることは要求されません。署名が無効な場合、Directory Server は警告をログに記録します。
- サーバーの動作を変更するには、`cn=config` 上で `ds-require-valid-plugin-signature` 属性と `ds-verify-valid-plugin-signature` 属性を調整します。どちらの属性も、値 `on` または `off` を設定できます。
- 6485560 Directory Service Control Center では、別のサフィックスにリフェラルを返すように設定されたサフィックスを参照できません。

- 6488197 Windows システムでのインストール後およびサーバーインスタンス作成後は、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダに対するファイルアクセス権により、すべてのユーザーにアクセスが許可されます。
- この問題点に対処するには、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダのアクセス権を変更します。
- 6488284 HP-UX プラットフォームの場合、次のセクションの Directory Server Enterprise Edition マニュアルページに次のコマンド行からアクセスできません。
- man5dpconf。
 - man5dsat。
 - man5dsconf。
 - man5dsoc。
 - man5dssd。
- この問題を回避するには、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Man Page Reference](#)』のマニュアルページにアクセスします。ここから、Directory Server Enterprise Edition のすべてのマニュアルページを PDF 形式でダウンロードできます。
- 6490557 不正な CoS テンプレートの入力を試みると、Directory Server 6 のバージョンでクラッシュの原因となります。
- 6490653 Internet Explorer 6 を使用して、Directory Service Control Center 上で Directory Server のリフェラルモードを有効にすると、リフェラルモードの確認ウィンドウが小さいために、テキストの一部が切れて表示されません。
- この問題点に対処するには、Mozilla Web ブラウザなどの別のブラウザを使用します。
- 6491849 レプリカをアップグレードし、新しいシステムにサーバーを移動したあと、新しいホスト名を使用するレプリケーションアグリーメントを再作成する必要があります。Directory Service Control Center では、既存のレプリケーションアグリーメントを削除できますが、新規アグリーメントを作成することはできません。
- 6492894 Red Hat システムでは、dsadm autostart コマンドによって、ブート時に確実にサーバーインスタンスが起動されることは限りません。
- 6494997 DSML を設定している場合、dsconf コマンドは、適切な dsSearchBaseDN 設定を要求しません。

- 6495004 Windows システムでは、インスタンスの `basename` が `ds` である場合、Directory Server が起動に失敗する現象が確認されています。
- 6497053 ZIP 形式の配布からインストールするときに、`dsee_deploy` コマンドのオプションで `SNMP` ポートおよび `ストリームアダプタポート` を設定できません。
- この問題に対処するには、次の手順に従います。
1. Web コンソールまたは `dpconf` を使用して、`Monitoring` プラグインを有効にします。
 2. `cacaoadm set-param` を使用して、`snmp-adaptor-port`、`snmp-adaptor-trap-port`、および `commandstream-adaptor-port` を変更します。
- 6497894 `dsconf help-properties` コマンドは、インスタンス作成後にのみ正しく機能するように設定されています。また、オンラインマニュアルで、`dsml-client-auth-mode` コマンドのデフォルト値が間違っていて記述されています。正しい値のリストは `client-cert-first` | `http-basic-only` | `client-cert-only` です。
- 6500936 ネイティブパッチ配布では、アクセスログのフィルタリング用の日付選択に使用するミニチュアカレンダーが、繁体字中国語に正しくローカライズされていません。
- 6501320 カスタムスキーマのインデックスの作成中に、`all-ids-threshold` のサフィックスレベルの変更が DSCC によって完全に反映されません。
- 6503509 `dscconmon`、`dsccreg`、`dscctest`、および `dsccrepair` コマンドによって表示される一部の出力がローカライズされていません。
- 6503546 システムのロケールを変更してから DSCC を起動しても、ポップアップウィンドウのメッセージが選択したロケールで表示されません。
- 6504180 Solaris 10 の英語および日本語ロケールで、DN に複数バイト文字を持つインスタンスの場合にパスワード確認が失敗します。
- 6504549 `ns-slapd` プロセスが `rsh` を使用してリモートで開始された場合、Java Enterprise System Monitoring Framework による Directory Server のインスタンスの検出に成功しません。
- 6506019 HP-UX で、`ns-slapd` の実行中のプロセスから `gdb` を切り離すと、プロセスが強制終了され、コアダンプが生成されます。
- 6507312 HP-UX システムでは `gdb` での調査のあと、NSPR ライブラリを使用したアプリケーションがクラッシュしてコアダンプします。こ

の問題は、gdb を実行中の Directory Server インスタンスに接続したあと、gdb quit コマンドを使用した場合に発生します。

6520646 Internet Explorer を使用しているときに「DSCC オンラインヘルプの参照」をクリックしても、オンラインヘルプが表示されません。

6527999 Directory Server のプラグイン API には、slapi_value_init()、slapi_value_init_string()、および slapi_value_init_berval() 関数が含まれています。

これらすべての関数が内部要素をリリースするためには「done」関数が必要になります。しかし、パブリック API に slapi_value_done() () 関数がありません。

6539650 パスに複数バイト文字を含む Directory Server インスタンスを DSCC で作成しようとする、失敗する場合があります。また、そのようなインスタンスからほかの通常タスクを開始または実行しようとする、失敗する場合があります。

これらの問題の一部は、インスタンスの作成時に使用していた文字セットを使用することによって解決できます。文字セットを設定するには、次のコマンドを実行します。

```
# cacoadm list-params | grep java-flags
  java-flags=-Xms4M -Xmx64M

# cacoadm stop
# cacoadm set-param java-flags="-Xms4M -Xmx64M -Dfile.encoding=utf-8"
# cacoadm start
```

これらの問題を回避するには、インスタンスパスに ASCII 文字のみを使用します。

6541040 Directory Service Control Center を使用してパスワードポリシーを変更しているときに、変更されていない属性が予期せずリセットされることがあります。

Directory Service Control Center を使用してデフォルトパスワードポリシーを管理すると、エラーは発生しません。しかし、Directory Service Control Center を使用して特別なパスワードポリシーを管理すると、変更されていない属性がリセットされる可能性があります。

6542857 Solaris 10 で Service Management Facility (SMF) を使用してサーバーインスタンスを有効にした場合、システムをリブートしてもインスタンスが起動しないことがあり、次のエラーを返しません。

```
svcadm: Instance "svc:/instance_path" is in maintenance state.
```

- この問題を回避するには、ローカルユーザーを使用して Directory Server および Directory Proxy Server サービスを作成します。
- 6547992 HP-UX では、`dsadm` および `dpadm` コマンドで `libcudata.sl.3` 共有ライブラリが検出されない可能性があります。
- この問題を回避するには、`SHLIB_PATH` 変数を設定します。
- ```
env SHLIB_PATH=${INSTALL_DIR}/dsee6/private/lib dsadm
```
- 6550543 DSCC が Tomcat 5.5 および JDK 1.6 とともに使用されている場合、エラーが発生する可能性があります。
- この問題を回避するには、代わりに JDK 1.5 を使用します。
- 6551672 Solaris 10 に含まれる Sun Java System Application Server は、認証済みメカニズムのための SASL クライアント接続を作成できず、共通エージェントコンテナと通信しません。
- 回避方法として、`appserver-install-path/appserver/config/asenv.conf` ファイルを編集し、`AS_JAVA` エントリを `AS_JAVA="/usr/java"` に置き換えることによって、アプリケーションサーバーが使用する JVM を変更します。Application Server ドメインを再起動します。
- 6551685 `dsadm autostart` によって、システムのリブート時にネイティブの LDAP 認証が失敗することがあります。
- この問題を回避するには、リブートスクリプトの順序を逆にします。デフォルトの順序は `/etc/rc2.d/S71ldap.client` および `/etc/rc2.d/S72dsee_directory` です。
- 6557480 Solaris 9 および Windows では、Web Archive (WAR) ファイルを使用して構成されたコンソールからオンラインヘルプにアクセスすると、エラーが表示されます。
- 6559825 レプリケートされたサフィックスのあるサーバーで DSCC を使用してポート番号を変更すると、サーバー間のレプリケーションアグリーメントを設定する場合に問題が発生します。
- 6571672 システム上で `unzip` が使用できない場合、`dsee_deploy` はどの製品もインストールしません。
- 6583131 ローカライズ版 Directory Service Control Center を使用するには、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 コアパッチよりも先に Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 ローカライズ版パッチを適用するか、または次のコマンドを指定どおりの順序で実行します。
- ```
# dscctest console-unreg
# dscctest console-reg
```


Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 パッチよりも先に Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 ローカライズ版パッチを適用する場合は、`dscsetup console-unreg` および `console reg` コマンドを実行する必要はありません。

ZIP 形式のインストールでは、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 のローカライズ版パッチが Directory Service Control Center に自動的に適用されません。回避方法としては、WAR ファイルを配備取消してから再配備します。

6587801

version 6.1 以降の `dsadm` コマンドと Directory Service Control Center は、version 6.0 の `dsadm` コマンドで作成された Directory Server インスタンスの組み込みの CA 証明書を表示しません。

この問題に対処するには、次を実行します。

`modutil` の 64 ビットバージョンとともに 64 ビットモジュールを追加します。

```
$ /usr/sfw/bin/64/modutil -add "Root Certs 64bit" -libfile /usr/lib/mps/64/libnssckbi.so -nocertdb \
-dbdir /instance-path/alias -dbprefix slapd- -secmod secmod.db
```

6594285

Directory Service Control Center には RBAC 機能がありません。

6595805

UTF-8 以外の符号化形式では、インストールパスに非 ASCII 文字が含まれているときに、共通エージェントコンテナの内部で `dsee_deploy` ツールによる Java Enterprise System Monitoring Framework のセットアップが失敗します。

6630897

`dsadm show-* -log 1` コマンドの出力に正しい行が含まれていません。以前にローテーションされたログの最終行を含んでいる可能性があります。

6630924

ログのいくつかの行に 1024 文字以上の文字が含まれている場合、`dsadm show-* -log` コマンドの出力が正しくありません。

6634397

すべてのインスタンス (0.0.0.0) 上で待機していると DSCC で登録したサーバーに対して `dsconf` を使用してサーバーの待機アドレスを変更しようとする、DSCC エラーが発生します。

SSL ポートのみとセキュリティー保護された待機アドレスを Directory Server Enterprise Edition 6.3 で設定するには、次の回避方法を実行します。

1. サーバーを DSCC から登録解除します。

```
dsccreg remove-server /local/myserver
```

2. LDAP ポートを無効にします。

```
dsconf set-server-prop ldap-port:disabled
```


3. セキュリティー保護された待機アドレスを設定します。

```
dsconf set-server-prop secure-listen-address:IPaddress
```

```
dsadm restart /local/myserver
```

4. DSCC を使用してサーバーを登録します。「サーバーの登録」ウィザードでサーバーの IP アドレスを指定します。この操作を元に戻すことはできません。

- 6637242 WAR ファイルの配備後、「トポロジの表示」ボタンが機能しない場合があります。
 org.apache.jsp.jsp.ReplicationTopology_jsp._jspService に基づいた Java の例外が起きることがあります。
- 6638990 / 6641357 ldapmodify コマンドによる一括インポートは既存のデータに損害を及ぼすことがあります。オプション `-B suffix` を指定すると、そのサフィックスを持つ既存のデータがすべて削除されます。
 したがって、ldapmodify のマニュアルページにある、ldapmodify コマンドを使用した一括インポートによって既存のエントリが削除されることはないという記述は誤りです。
- 6640755 Windows の韓国語ロケールで `ns-slapd` が開始に失敗すると、`dsadm start` コマンドが `nsslapd` エラーログを表示しません。
- 6644161 韓国語ロケールの `PN_GUILong` で、「暗号化属性」セクションの「属性の削除」ボタンをクリックすると、次の不完全なエラーメッセージが表示されます。
 You have chosen to remove
 正しいメッセージは次のとおりです。
 You have chosen to remove {0} from the list of encrypted attributes.
 In order for the database files to reflect the configuration and to work properly you must Initialize the Suffix.
 Do you want to continue?
- 6648240 Directory Service Control Center で「インデックス」タブの「追加のインデックス」テーブルの属性を変更または削除すると、ブラウザが更新されるまで無効な情報が表示される可能性があります。
- 6650105 Windows 2000 で、ZIP 形式の配布の Directory Service Control Center、Tomcat 5.5 アプリケーションサーバー、および Internet Explorer 6 の組み合わせを使用しているときに、「新規 DS アクセス制御指示」ウィザードの「ステップ 3: アクセス権限の割り当て」で「指定されたユーザーに権限を割り当て:」リストボックスの「削除」ボタンをクリックすると、次のような例外が発生することがあります。

```
The following error has occurred:
Handler method "handleAssignACIToDeleteButtonRequest" not implemented,
or has wrong method signature
Show Details
Hide Details
com.ipplanet.jato.command.CommandException: Handler method
"handleAssignACIToDeleteButtonRequest" not implemented, or has wrong method signature
    com.ipplanet.jato.view.command.DefaultRequestHandlingCommand.execute
(DefaultRequestHandlingCommand.java:167)
    com.ipplanet.jato.view.RequestHandlingViewBase.handleRequest
(RequestHandlingViewBase.java:308)
    com.ipplanet.jato.view.ViewBeanBase.dispatchInvocation(ViewBeanBase.java:802)
```

6653574 Directory Server 6.X マスターから 5.1 マスターへのレプリケーションが正しく機能していません。

6658483 繁体字中国語版の Directory Service Control Center で、サフィックスの「レプリケーション設定」タブの文字列「データでサフィックスを初期化...」の翻訳が不明瞭です。

6660462 Directory Server Enterprise Edition 6.2 から Directory Server Enterprise Edition 6.3 にアップグレードする前に、Directory Server または Directory Proxy Server の各インスタンスで `ntservice` を手動で停止する必要がありますが、`dsee_deploy` コマンドが、Microsoft Windows 2000 プラットフォーム上の Directory Server または Directory Proxy Server の動作中インスタンスの識別に失敗します。

Microsoft Windows 2000 で ZIP 形式の配布を使用している場合、アップグレード時に `dsee_deploy` コマンドが失敗する可能性があります。エラーメッセージは次のとおりです。

```
error: cannot delete old
C:/local/upg6263/./dsee6/lib/bin/dsee_ntservice.exe
```

これは、Directory Server または Directory Proxy Server のインスタンスがまだ実行中であることを示します。インスタンスを停止するには、Microsoft Windows 2000 で「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」>「管理ツール」>「サービス」を選択します。右側の列に表示された Directory Server または Directory Proxy Server の各サービスについて、インスタンスを右クリックして「停止」を選択します。

6663685 Directory Service Control Center で、「サフィックス設定のコピー」操作によって誤ったポップアップウィンドウが表示されることがあります。

6687375 DSCC で作成するエージェント証明書を DSCC で取得できないことがあります。DSCC は証明書を DSCC レジストリの「agent-profile」に格納しようとしませんが、DSCC レジストリの `ldap-port` がループバックインタフェースにバインドされている

場合、証明書を格納できません。ただし、DSCCはDSCCレジストリを読み取ることができる設計になっているため、DSCCレジストリとの通信にはlocalhostを使用する必要があります。

この制限に対処するには、`ldapmodify` コマンドを使用してDSCCレジストリに `agent-profile` を作成します。

6689290 ローカライズ版のDSCCからサーバーを停止/起動/再起動しようとする、文字化けしたローカライズ版メッセージが表示されることがあります。

回避方法としては、`cacao.properties` ファイルを編集し、`-Dfile.encoding=utf-8` フラグを削除してから、任意のロケールで `cacao` を再起動します。

6696857 Directory Proxy Server インスタンスにDSCCを通じて有効にされた、セキュリティー保護された待機ソケット/ポートのみがある場合で、サーバー証明書がデフォルトではない(たとえば、認証局によって署名された証明書など)場合、DSCCを使用してインスタンスを管理できません。

この問題を回避するには、DPS インスタンスの登録を解除してからふたたび登録します。別の解決方法としては、サーバー証明書を使用するDSCCレジストリ内のDPSインスタンスの `userCertificate` 情報を更新することです。

6703850 Directory Server 5 および Directory Server Enterprise Edition 6 の各バージョンで、Solaris 9 および Solaris 10 (SPARC または x86) 上で Veritas File System (VxFS) バージョン 4.1 および 5.0 を使用するとき、パフォーマンスの問題が発生する場合があります。パフォーマンスの問題は `fdsync` システムコールの内部で発生し、Directory Server のチェックポイント処理などに影響します。この問題には Solaris の `VMODSORT` 機能を使用して対処します。詳細は、<http://sunsolve.sun.com/search/document.do?assetkey=1-66-201248-1> を参照してください。

Directory Server Enterprise Edition 6 で、`VMODSORT` 機能を有効にして Veritas File System を使用するときパフォーマンスの問題が発生することがあります (CR 6703850)。この問題は (`id2entry.db3` などの) ファイルにページが追記されるときに発生します。このエラーが原因で、`fttruncate` システムコールによるリソース消費は、`VMODSORT` 機能なしで Veritas File System を使用するときと同等になります。

6705472 パスワードポリシーはパスワードの長さをバイト数で測定するため、複数バイト文字を含むパスワードは、その文字数がポリ

シーで指定された下限に満たなくともパスワードの長さポリシーに適合する可能性があります。たとえば、1つの2バイト文字を含む7文字のパスワードは、パスワードの最小の長さが8文字に設定されたパスワードポリシーに適合します。

6707789 modrate コマンドのマニュアルページの例 1 に、使用法の誤りが含まれています。正しい例は次のとおりです。

```
modrate -D uid=hmiller,ou=people,dc=example,dc=com -w hillock -b "uid=test%d,ou=test,dc=example,dc=com" \
-C 3 -r 100 -M 'description:7:astring'
```

6712064 nsslapd-groupevalsize-limitis プロパティに関する記述がありません。このプロパティに関する記述は次のとおりです。

名前 nsslapd-groupevalsize-limit-ACI 評価のための静的グループメンバーの最大数。

説明 ACI 評価のために静的グループに含めることができるメンバー(そのサブグループのメンバーを含む)の最大数を定義します。

エントリ DN cn=config

有効範囲 0 から最大 64 ビットの整数値

値 -1 は無制限を意味します。

デフォルト値 5000

構文 Integer

例 nsslapd-groupevalsize-limit: 5000

属性 次の属性の説明については、attributes(5) のマニュアルページを参照してください。

属性タイプ	属性値
利用可能	SUNWldap-directory
安定性レベル	廃止: このリリースよりもあとに削除予定

6720595 UNIX システムで、dsconf set-log-prop または DSCC を使用してログファイルのパスを変更しようとする試みが、ログファイルの新しいパスがまだ存在していない場合に失敗します。

6722534 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Man Page Reference』で、minheap の値についての記述が誤っています。

- す。minheap の値は、起動時にサーバーによって使用されるヒープメモリーの容量の 2 倍です。
- 6723208 キャリッジリターンを含む属性値を編集しようとする、値が破損します。
- 6723590 バージョン 6.2 にはデータベースの破損が存在する可能性があります。そのため、Directory Server Enterprise Edition 6.2 から 6.3.1 にアップグレードする前に、データベースを LDIF ファイルにエクスポートしてから、その LDIF ファイルを再インポートすることによってデータベースを再構築してください。レプリケーション環境では、すべてのサーバーを再構築または再初期化します。レプリケーション環境でのサーバーのエクスポート、インポート、および初期化については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド](#)』で説明しています。

注 - これは、Directory Server Enterprise Edition 6.2 からのアップグレードのみに適用されます。バージョン 6.0、6.1、または 6.3 からのアップグレードには適用されません。

- 6725346 データベース名には ASCII (7 ビット) の英数字、ハイフン (-)、および下線 (_) のみを含むことができます。Directory Server は、データベース名、ファイル名、およびパス名の文字列に複数バイト文字 (中国語や日本語の文字セットなど) を受け付けません。複数バイトの文字を含む Directory Server サフィックスを作成する場合にこの問題を回避するには、複数バイト文字を含まないデータベース名を指定します。コマンド行でサフィックスを作成する場合は、たとえば、`dsconf create-suffix` コマンドの `--db-name` オプションを明示的に指定します。
- ```
$ dsconf create-suffix --db-name asciiDBName multibyteSuffixDN
```
- サフィックスのデフォルトデータベース名は使用しないでください。データベース名に複数バイト文字は使用しないでください。
- 6742347 サービスとして登録されているとき、Directory Server Enterprise Edition 6 が Windows のシャットダウン中に正常に停止しません。システムの再起動時に、次のメッセージがエラーログファイルに記録されています。

```
WARNING<20488> - Backend Database - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - Detected Disorderly Shutdown last time Directory Server was running, recovering database.
```

この問題に対処するには、シャットダウンまたは再起動の前に Directory Server を手動で停止します。

Microsoft Windows でインスタンスを停止するには、「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」>「管理ツール」>「サービス」を選択します。右側の列に表示された Directory Server の各サービスについて、インスタンスを右クリックして「停止」を選択します。または、次のコマンドを実行します。

```
$ dsadm.exe stop instance-path
```

6750837

Microsoft Windows のネットワークドライブの仕様が **大文字**と **小文字**を区別します。このため、たとえば `C:/` と `c:/` の両方を使うと、マスターの再起動後に DSEE 管理コマンドが原因でレプリケーションが失敗する場合があります。この問題を回避するには、「`DSEE_HOME/ds6/bin/dsconf accord-repl-agmt`」を使用してレプリケーションアグリーメントを修正します。

6751354

Microsoft Windows のネットワークドライブの仕様が **大文字**と **小文字**を区別します。このため、たとえば `C:/` と `c:/` の両方を使うと、DSEE 管理コマンドによって、次に示すようなさまざまなエラーメッセージが表示される場合があります。

```
WARNING<4227> - Plugins - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - Detected plugin paths from
another install, using current install
```

この警告が表示されないようにするには、一貫して `c:/` を使用します。

6752475

Windows 2000 で、バックエンドデータベースエラーが報告されることがあります。この問題は Microsoft Windows にのみ存在します。この問題が発生すると、次のエラーメッセージがエラーログに記録されます。

```
ERROR<20742> - Backend Database - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - BAD MAP 1, err=5
ERROR<20741> - Backend Database - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - BAD EV 1, err=5
```

このエラーは通常は無害ですが、まれに、ユーザー (管理者またはほかの任意のユーザー) によって生成されたインスタンスが、別のユーザー (Windows サービス、管理者の、またはほかの任意のユーザー) によって生成されたインスタンスと競合するときにクラッシュを引き起こすことがあります (6798026)。

本稼働環境でこの問題に対処するには、すべてのインスタンスをサービスとして登録する必要があります。

テスト中にこの問題に対処するには、Windows サービスとして起動されるインスタンスがない場合、新しいインスタンスが同じユーザーによって起動されるようにする必要があります。インスタンスが Windows サービスとして起動される場合は、リモートデ

スクトップ接続 (rdesktop) を使用して新しいインスタンスを起動することが唯一の回避方法です。

6752625

DSCC のオンラインヘルプから不明な Web ページにリンクされる場合があります。特に、一部のウィザードメニューで次のような記述があります。

For more information about data source configuration, see the "Sun Java System Directory Server Enterprise Edition Reference."

この DSEE リファレンスドキュメントへのリンクを選択すると、エラーメッセージが表示されます。

この問題を回避するには、3 番目のマウスボタンでこのリンクを選択して、ポップアップメニューから「Open Link in New Window」を選択します。選択したドキュメントが新しいブラウザウィンドウに表示されます。

6753020

マルチマスターレプリケーション構成で、Directory Server 6 の各バージョンから Directory Server 5.2 マスター (最大 4 台のサーバーで構成) へのレプリケーションは正常に機能します。

6753742

マルチマスターレプリケーション構成で、JES 4 から Directory Server 6.3 へのマスターの移行が失敗する場合があります。たとえば、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide](#)』の「[Migrating the Masters](#)」の手順 6 の実行後に次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
INFORMATION - NSMMReplicationPlugin - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - _replica_configure_ruv: failed to create replica ruv tombstone entry (suffix); LDAP error - 53
```

この問題に対処するには、次の手順を使用します。

1. すべての JES 4 マスターを停止します。
2. `dse.ldif` 構成ファイルを手動で編集し、`nsslapd-readonly: on` を `nsslapd-readonly: off` に変更します。
3. `dsmig migrate-config` 移行コマンドを実行します。

6755852

日本語版の Windows 上で DSEE6.3 パッチ ZIP (以降) をインストールしようとする、Cacao に JESMF を配備するときに常に失敗し、次のような結果になります。

```
Deploying JESMF in Cacao...
Failed to run install-path/dsee6/cacao_2/bin/cacaoadm.bat deploy
install-path/dsee6/mfwk/xml/com.sun.mfwk.xml
####
Cannot execute command deploy: The connection has been closed by the server .
####
Exit code is 1
Failed to register DS in JESMF.
Error: Cannot register mfwk into cacao framework:
```



問題の発生後にインストールを完了するには、次の手順を使用します。

1. Cacao を起動するために、次の内容を `mfwk.properties` に追加します。

```
com.sun.mfwk.agent.objects=false
```

2. 次のコマンドを実行して Cacao を再起動します。

```
cacaoadm start
```

Cacao が動作し続けることを確認します。

3. 次の 2 つのコマンドを実行します。

```
$ dscset mfwk-unreg
$ dscset mfwk-reg -t
```

4. 次のコマンドを実行して、mfwk が Cacao フレームワークに正しく登録されていることを確認します。

```
$ install-path/dsee6/cacao_2/bin/cacaoadm list-modules
```

mfwk が正しく登録されている場合、コマンドは次の結果を返します。

```
List of modules registered:
com.sun.cacao.agent_logging 1.0
com.sun.cacao.command_stream_adaptor 1.0
com.sun.cacao.efd 2.1
com.sun.cacao.instrum 1.0
com.sun.cacao.invoker 1.0
com.sun.cacao.mib2simple 1.0
com.sun.cacao.rmi 1.0
com.sun.cacao.snmpv3_adaptor 1.0
com.sun.cmm.ds 1.0
com.sun.directory.nquick 1.0
com.sun.mfwk 2.0
```

5. 次の 2 つのファイルを `install-path/dsee6/bin` にコピーします。

```
installer-path\DSEE_ZIP_Distribution\dsee_deploy.exe
installer-path\DSEE_ZIP_Distribution\dsee_data\listrunnings.exe
```

6756152/2168088 Windows で LDAP コマンドが機能しません (IPv6 有効)。

6772760 DSEE 6 の各バージョンで、起動後ただちにサーバーを停止しようとするとクラッシュが発生する場合があります。

6772879 Directory Server Enterprise Edition 5.x のパスワードポリシーは、`password*` の命名パターンを使用して属性を管理します。Directory Server Enterprise Edition 6.x のパスワードポリシーは、`pwd*` の命名パターンを使用して属性を管理します。Directory Server Enterprise Edition を互換性モード (両方のポリシーの属性が管理される) で実行しているとき、パスワードポリシーの機能を無効にすると、関連する属性の一部の値について 5.x



属性と 6.x 属性の間で差異が生じることがあります。たとえば、passwordUnlock が off に設定されている場合、pwdLockoutDuration の値が 0 で、passwordLockoutDuration の値が 0 でないという状況が生じることがあります。

- 6776034 DSCC エージェントを Solaris 9 上の CACAO に登録できません。SUNWxcu4 パッケージがシステムに存在しない場合、「Failed to configure Cacao.」というエラーが表示されコマンド `DSEE_HOME/dsc6/bin/dscsetup cacao-reg` が失敗します。
- 6777338 Directory Server 5.2 から Directory Server 6.3 へのマルチマスターレプリケーション移行に関して、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Migration Guide](#)』の「[Manual Reset of Replication Credentials](#)」の記述が不完全です。手順では次のコマンドを実行するよう指示しています。

```
dsconf set-server-prop -h host -p port def-repl-manager-pwd-file:filename
```

実際には、指示にない次のコマンドも実行する必要があります。

```
dsconf set-repl-agmt-prop -p port_master1 replicated_suffix master2:port_master2 auth-pwd-file:filename
```

`dsmig migrate-config` コマンドは、レプリケーション資格を正しくリセットするために呼び出す必要があるコマンドを返します。

- 6786078 存在しない Sun Microsystems プラグインが、有効な署名を持つものとして認識されることがあります。次の警告メッセージが表示されます。

```
WARNING<4227> - Plugins - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - Detected plugin paths from another install, using current install.
```

この警告メッセージは、ベンダーが Sun Microsystems であるプラグインに対してのみ表示されます。

- 6790060 インデックスを使用せず ACI 評価を伴う検索で数個のエントリが返される場合に、検索パフォーマンスが大きく低下することがあります。この問題はこのリリース、つまり DSEE6.3.1 でのみ発生します。
- 6791372 メモリーリソースの不足が原因で、Directory Server 6 の各バージョンがクラッシュすることがあります。サーバーの `errorlog` ファイルに次のエラーメッセージが書き込まれます。

```
ERROR<5122> - binder-based resource limits - conn=-1 op=-1 msgId=-1 - System error: resource shortage PR_NewRWLock() failed for reslimit
```

- 6827661 Directory Server インスタンスがコンソールから、または `dsadm start` コマンドによってローカルで起動された場合、リモートデスクトップから `dsadm stop` コマンドを使用して Directory Server インスタンスを停止できないことがあります。

この問題に対処するには、次のコマンドを実行してサービスを有効にします。

```
dsadm enable-service --type WIN_SERVICE instance-path
```

6831959

「[Vulnerability Note VU#836068, MD5 vulnerable to collision attacks \(http://www.kb.cert.org/vuls/id/836068\)](http://www.kb.cert.org/vuls/id/836068)」で説明されている問題を考慮すると、Directory Server Enterprise Edition で署名付き証明書に MD5 アルゴリズムを使用することは避けるべきです。

証明書の署名アルゴリズムを調べるには、次の手順を使用します。

1. 次のコマンドを実行して、特定の Directory Server インスタンスで定義されている証明書の一覧を表示します。

```
$ dsadm list-certs instance-path
```

2. 定義済みの各証明書に対して次のコマンドを実行し、証明書が MD5 アルゴリズムを使用して署名されているかどうかを調べます。

```
$ dsadm show-cert instance-path cert-alias
```

次の例は、MD5 署名された証明書に対して dsadm show-cert コマンドを実行したときの一般的な出力を示します。

```
Certificate:
Data:
[...]
Signature Algorithm: PKCS #1 MD5 With RSA Encryption
[...]
```

次のコマンドを実行して、MD5 署名されたすべての証明書をデータベースから削除します。

```
$ dsadm remove-cert instance-path cert-alias
```

次の手順を使用して、証明書データベースのパスワードを更新します。(dsadm コマンドは、Directory Server インスタンスの生成時にデフォルトの証明書データベースパスワードを生成します)。

1. Directory Server インスタンスを停止します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
$ dsadm set-flags instance-path cert-pwd-prompt=on
```

パスワードの入力を求めるメッセージが表示されます。

3. 8 文字以上のパスワードを入力します。
4. Directory Server インスタンスを再起動し、入力を求められたら内部(ソフトウェア)トークンを入力します。

MD5 署名されたすべての証明書を、SHA-1 署名された証明書と置き換えます。インストールで自己署名付き証明書を使用するか認証局から取得した証明書を使用するかに応じて、次のどちらかの手順を使用します。

次の手順を使用して、自己署名付き証明書を生成し、保存します。

1. Directory Server 管理者として次のコマンドを実行し、SHA-1 署名アルゴリズムを使用して自己署名証明書を発行します (certutil コマンドについては、<http://www.mozilla.org/projects/security/pki/nss/tools/certutil.html> を参照してください)。

```
$ certutil -S -x -n certName -s subject -d certs-db-path \
-P "slapd-" -t "CTu,u,u" -Z SHA1
```

|                                        |                                                     |
|----------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| -S                                     | 個別証明書を生成してその証明書をデータベースに追加することを指定します。                |
| -x                                     | 自己署名証明書を生成することを指定します。                               |
| -n <i>certName</i>                     | 証明書のエイリアス名 (例: defaultCert) を指定します。                 |
| -s " <i>subject</i> "                  | 新しい証明書または証明書リクエストの証明書所有者 (例: CN=...,OU=...) を指定します。 |
| -d <i>instance-path</i> / <i>alias</i> | 証明書および鍵のデータベースファイルを格納するデータベースディレクトリを指定します。          |
| -P "slapd-"                            | 証明書データベースの接頭辞を指定します                                 |
| -t "CTu,u,u"                           | 信頼の引数を指定します。                                        |
| -Z SHA1                                | 証明書の署名アルゴリズムとして SHA-1 を指定します。                       |

次の例は、一般的な使用方法を示しています。

```
$ install-path/dsee6/bin/certutil -S -x -n "A-New-Cert" \
-s "CN=myhostname,CN=8890,CN=Directory Server,O=CompanyName" \
-d instance-path/alias \
-P "slapd-" -t "CTu,u,u" -Z SHA1
```

このコマンドにより、次のプロンプトが表示されます。

[Password or Pin for "NSS Certificate DB"]

- 作成した新しい証明書データベースのパスワードを入力します。

次の手順を使用して、認証局 (CA) から証明書を取得し、保存します。

- 次のコマンドを実行して、認証局によって署名されたサーバー証明書の要求を発行します。

```
$ certutil -R -s subject -d certs-db-path -P "slapd -a -Z SHA1 -o output-file
```

|                         |                                                          |
|-------------------------|----------------------------------------------------------|
| -R                      | 認証局によって署名されたサーバー証明書の要求を生成することを指定します                      |
| -s "subject"            | 新しい証明書または証明書要求の証明書所有者を指定します。たとえば、CN=...,OU=... のように指定します |
| -d instance-path /alias | 証明書および鍵のデータベースファイルを格納するデータベースディレクトリを指定します。               |
| -P "slapd-"             | 証明書データベースの接頭辞を指定します                                      |
| -a                      | 証明書要求をデフォルトのバイナリ形式ではなく ASCII 形式で作成することを指定します             |
| -o output-file          | 証明書要求を格納する出力ファイルを指定します                                   |

次の例は、一般的な使用方法を示しています。

```
$ install-path/dsee6/bin/certutil -R \
-s "CN=myhostname,CN=7601,CN=Directory Server,0=CompanyName" \
-d instance-path/alias \
-P "slapd-" -a -o /tmp/cert-req.txt
```

このコマンドにより、次のプロンプトが表示されます。

[Password or Pin for "NSS Certificate DB"]

- 作成した新しい証明書データベースのパスワードを入力します。
- 認証局で MD5 署名アルゴリズムが使用されなくなっていることを確認してから、認証局によって署名されたサーバー証明書を受け取るための証明書要求を認証局 (使用している規則に依

じて社内または社外の)に送信します。詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド』の「CA 署名付きサーバー証明書を要求する」を参照してください。

4. 認証局から新しい証明書が送信されたら、次のコマンドを実行して証明書を証明書データベースに追加します。

```
$ dsadm add-cert ds-instance-path cert-alias signed-cert-alias
```

この手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド』の「CA 署名付きサーバー証明書と信頼できる CA 証明書を追加する」を参照してください。

5. 信頼できる認証局証明書がまだ証明書データベースに保存されていない場合は、次のコマンドを実行して追加します。

```
$ dsadm add-cert --ca instance-path trusted-cert-alias
```

この手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド』の「CA 署名付きサーバー証明書と信頼できる CA 証明書を追加する」を参照してください。

6. 次のコマンドを実行して、新しい証明書が使用されていることを確認します。

```
$ dsadm show-cert instance-path cert-alias
```

```
Certificate:
Data:
[...]
Signature Algorithm: PKCS #1 SHA-1 With RSA Encryption
[...]
```

6834291

`pwd-must-change-enabled` プロパティーが `on` に設定されているときに、プロキシ承認制御を使用してユーザーアカウントの操作を呼び出す場合、リセットパスワードを持っているユーザーのために実行できる操作は、ユーザーのアカウントパスワードの変更だけです。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 より前のバージョンでは、この操作は `account unusable` (CR 6651645 を参照) として拒否されていました。Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 では、プロキシ承認を使用したりリセットパスワードの変更のサポートが追加されましたが、既存の配備に 6.3.1 パッチを適用すると次の問題が発生していました。アカウントパスワードが管理操作によってリセット

されている場合に、プロキシ承認を使用してそのアカウントを操作すると、操作が `userpassword` 属性の変更には厳密に適用されません。 -

この問題の原因は、Directory Server のプラグイン順序の変更にあります。6.3.1 パッチを適用するときに、既存のインスタンスに対してはプラグイン順序が修正されません。Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレード後に作成された Directory Server インスタンスの場合、プラグイン順序は正しく設定されます。

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレード前に作成された Directory Server インスタンスの場合、管理者が `ldapmodify` コマンドを使用してインスタンスのプラグイン順序リストを修正する必要があります。

次の例では、プラグイン順序が元の順序から変更されていないと仮定しています。配備でカスタムの順序を使用している場合は、そのカスタマイズを含めるように例を変更してください。ただし、必ずすべての PwP preoperation の前に ACL preoperation を置いてください。

変更を有効にするためにインスタンスを再起動します。

```
$ install-path/dsrk6/bin/ldapmodify
dn: cn=plugins, cn=config
changetype:modify
replace: plugin-order-preoperation-finish-entry-encode-result
plugin-order-preoperation-finish-entry-encode-result: ACL preoperation,PwP preoperation
-
replace: plugin-order-preoperation-search
plugin-order-preoperation-search: ACL preoperation,*
-
replace: plugin-order-preoperation-compare
plugin-order-preoperation-compare: ACL preoperation,*
-
replace: plugin-order-preoperation-add
plugin-order-preoperation-add: ACL preoperation,PwP preoperation,*
-
replace: plugin-order-internalpreoperation-add
plugin-order-internalpreoperation-add: PwP internalpreoperation,*
-
replace: plugin-order-preoperation-modify
plugin-order-preoperation-modify: ACL preoperation,PwP preoperation,*
-
replace: plugin-order-internalpreoperation-modify
plugin-order-internalpreoperation-modify: PwP internalpreoperation,*
-
replace: plugin-order-preoperation-modrdn
plugin-order-preoperation-modrdn: ACL preoperation,*
-
replace: plugin-order-preoperation-delete
```

```

plugin-order-preoperation-delete: ACL preoperation,*
-
replace: plugin-order-bepreoperation-add
plugin-order-bepreoperation-add: PwP bepreoperation,*
-
replace: plugin-order-bepreoperation-modify
plugin-order-bepreoperation-modify: PwP bepreoperation,*

```

- 6867762 rotation-time または rotation-interval に従ってログのローテーションが行われる場合、ローテーションが発生する正確な時刻は、次のようないくつかの変数に依存します。
- rotation-time、rotation-interval、rotation-now、および rotation-size プロパティの値
  - ハウスキーピングスレッドのスケジュール
  - ローテーション条件が満たされたときのログファイルの実効サイズ
- したがって、ローテーションされたログファイルの *timestamp* (たとえば、*access.timestamp*) は保証されません
- 6872923 『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド](#)』の「[初回ログインパスワードポリシーを設定する](#)」で説明されている初回ログインパスワードポリシーのシナリオは不完全です。この例を実行する前に、グローバルパスワードポリシーのデフォルトエントリ ("cn=Password Policy,cn=config") の Password Must Change プロパティが TRUE に設定されていることを確認してください。
- 6876315 dsmig コマンドを実行しているユーザーが対象となるディレクトリサーバーインスタンスを保持していない場合、移行ファイルを生成しそのファイルにアクセスするのに必要なアクセス権がないためコマンドが失敗します。
- 対象となるディレクトリサーバーを保持し、少なくともソースディレクトリサーバーへの読み取りアクセス権を持っているユーザーが dsmig コマンドを実行した場合は成功します。こうした条件を満たせない場合、データベースをエクスポートしてから、新しいディレクトリサーバーにインポートすることで移行を実施してください。
- 6902940 Windows で、環境変数 PERL5LIB が以前に存在していた PERL バージョンに設定されていると、Cacao の構成が失敗することがあります。
- この問題点に対処するには、両方のスクリプトファイルを編集します。Directory Server Enterprise Edition の ZIP インストールの場合は、次の両方のファイルを編集します。

- `installPath/dsee6/cacao_2/configure.bat`
- `installpath/dsee6/cacao_2/bin/cacaoadm.bat`

Directory Server Enterprise Edition の Sun Java Enterprise System 5 インストールの場合は、次の両方のファイルを編集します。

- `C:\Program Files\Sun\JavaES5\share\cacao_2\configure.bat`
- `C:\Program Files\Sun\JavaES5\share\cacao_2\bin\cacaoadm.bat`

各ファイルを編集して、各ファイルの先頭に次の行を追加します。

```
set PERL5LIB=
```

6920893

Windows インストールで、SASL バインドオプション `authid` および `authzid` の値に複数バイト文字が指定されていると、`ldapsearch`、`ldapmodify`、`ldapcompare`、および `ldapdelete` コマンドが失敗します。コマンドは、生の文字を受け取る代わりに、インストールで使用されているコードページによって不適切に変換された文字を受け取ります。

この変換を防止してコマンドに生の文字を渡すには、次のいずれかのコードページを使用します。

- Windows 西ヨーロッパ言語用コードページ 1252
- Windows 日本語用コードページ 932 (Shift\_JIS)

プログラムで解決するには、`ldapsearch` などのコマンドの `fork/exec` を行う新しいプログラムを作成し、SASL バインド引数を `exec` 経由で(したがって、コードページによる変換なしで)渡します。

6928378

管理ガイドでは、Directory Service Control Center を使用してリフェラルを設定してサフィックスを読み取り専用にできると記述されていますが、これは誤りです。このサフィックスのレプリケーションが有効になっていないと、この機能は Directory Service Control Center に実装されません。



# Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Directory Proxy Server のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章では、次の内容について説明します。

- 89 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 で修正されたバグ」
- 92 ページの「Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項」
- 99 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1」

## Directory Proxy Server 6.3.1 で修正されたバグ

この節では、Directory Proxy Server リリース 6.3.1 で修正されたバグの一覧を示します。

- |         |                                                                                      |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 6492941 | JDBC ソースが使用できないとき、この JDBC ソースからのデータが必要でない場合でも、結合ビュー (LDAP + JDBC) からの検索が失敗します。       |
| 6513526 | cn=monitor の ldapsearch を実行すると、親エントリの前にリーフエントリが返されます。この条件では、一部のツールでエラーが発生する可能性があります。 |
| 6597598 | LDAP と JDBC の結合ビューから変更を行うと、NULL ポインタ例外が発生する可能性があります。                                 |
| 6597607 | 二次属性が要求されていない場合、二次データソースに対する要求がパフォーマンスに影響を与えるべきではありません。                              |
| 6597608 | 単一の LDAP トランザクションで2つの変更を適用しようとする、1つの属性が存在しない場合は、部分的にしか成功しない場合があります。                  |
| 6616898 | LDAP と JDBC の結合ビューを使用しているとき、objectclass 属性を二次ビューに格納できません。                            |

- 6618968 結合ビューからの検索で、一次ビューの属性が検索フィルタに含まれていない場合は(いくつかのエントリが二次ビューから返された場合でも)、まず二次ビューに対して検索が実行されるべきです。
- 6630730 高負荷の検索で NULL ポインタ例外が発生することがあります。
- 6637173 LDAP と JDBC の結合ビューで検索を行うとき、要求された二次属性に対するアクセス権をバインドユーザーが持っていないと、エントリが返されない場合があります。
- 6637608 高負荷の検索を実行すると、`ArrayIndexOutOfBoundsException` 例外または `NegativeArraySizeException` 例外が発生することがあります。
- 6638374 エントリの `uid` 属性に大文字が含まれている場合、そのエントリを結合ビューから追加できません。
- 6641925 LDAP と JDBC の結合ビューからエントリを追加するとき、追加要求に二次 JDBC 属性が含まれていない場合でも、エントリが JDBC ビューに追加されます。
- 6643181 LDAP と JDBC の結合ビューから属性を追加または置換するとき、値が SQL データベースには長すぎる場合、値が切り詰められます。
- 6646107 LDAP と JDBC の結合ビューからエントリを追加するとき、列のサイズを確認せずに文字列 (`varchar`) 値の更新や追加が行われ、データベースエラーが発生することがあります。
- 6653253 `FailoverLoadBalancingAlgorithm` の競合状態が原因で、検索負荷テストで予期しないエラーが発生します。
- 6653453 SSL を使用した持続検索が、データを返すことができません。
- 6654625 DPS のメモリー管理ポリシーにより、ガベージコレクションがトリガーされると同時に既存の接続が切断されます(メモリー不足の場合)。
- 6656324 エントリの追加時に、DN 値が小文字に変換されないことがあります。
- 6658613 LDAP と JDBC の結合ビューから共有属性(2つのデータソース上に存在する可能性がある)を削除すると、2つのビューの一方にその属性が存在しない場合、エラーが返されます。
- 6659381 64 ビットモードの JDK 1.6 を使用した高負荷の検索で、JVM がクラッシュすることがあります。
- 6660383 JDBC ソースが大文字と小文字を区別して列の値を処理する場合(DB2 など)、JDBC 属性の値を削除しようとするとう失敗することがあります。
- 6661375 ソケットが `CLOSE_WAIT` 状態のままになるため、サーバーが応答しなくなることがあります。

- 6661474 サーバーへの接続を頻繁に開いたり閉じたりすると、しばらくしてサーバーが応答しなくなり、再起動を実行するまで回復しないことがあります。
- 6663112 AMD64 Linux マシンでは、サーバーを 32 ビットモードで起動できません。
- 6670752 高負荷でサーバーのタイムアウトが発生し、ディレクトリサーバーに対する操作の再試行が発生することがあります。
- 6671579 検索フィルタ内で仮想的にマップされたベースを使用すると、状況によっては結果が返されないことがあります。
- 6676073 結合ビューの使用中に、二次データビューに対する変更が誤って一次データビューに適用されることがあります。
- 6680717 JDBC ビューを含んだ結合ビューを構成するときに、結合ルールの設定に失敗すると、StringIndexOutOfBoundsException 例外が発生することがあります。
- 6692627 特定の検索フィルタを使用すると、サーバーから復号化エラーが返されることがあります。
- 6697494 JDBC ビューを含んだ結合ビューを使用しているとき、ディレクトリサービスだけに存在するエントリの属性を削除しようとするとき失敗します。
- 6729861 `dpadm -V` で JVM のバージョンを検出できません。
- 6734722 サーバーがディレクトリサーバーへの接続を `CLOSE_WAIT` 状態のままにするため、ディレクトリサーバーが応答しなくなることがあります。
- 6753712 文字列型でない (`float` や `date` など) 属性を含んだ検索フィルタでは、JDBC ビューから結果を取得できないことがあります。
- 6761017 内部ワーカースレッドのデッドロックが発生し、サーバーが応答しなくなることがあります。
- 6761875 サーバーで CPU 使用率の急上昇が発生し、マシンのすべてのサービスが応答しなくなることがあります。
- 6764873 終了待機を最小化するための、バインドされた接続の管理の改善。
- 6766175 `ldapsearch` で、MySQL、Derby、または DB2 JDBC バックエンドからエントリの空の属性値が返されることがあります。ORACLE JDBC バックエンドの場合、空の属性値が返されることはありません。

## Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項

この節では、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

---

注 - Sun Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 パッチ 141958-01 は、Directory Proxy Server コンポーネントの問題を修正するために Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の上に適用するよう設計されています。詳細については、[99 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1」](#)を参照してください。

---

### Directory Proxy Server の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。

ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点

インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。製品ドキュメントの指示に従う場合、または Sun サポートの指示に従う場合のみ、ファイルのアクセス権を変更してください。

この制限事項に対処するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品のインストールおよびサーバーインスタンスの作成を行います。

自己署名サーバー証明書を更新できない

自己署名サーバー証明書を作成するときは必ず、その証明書を更新する必要がないように、十分な長さの有効期限を指定するようにしてください。

Directory Proxy Server は、結合データビューの書き込み操作で原子性を保証しない。原子性を保証するには、書き込み操作に結合データビューを使用しないでください。結合データビューで書き込み操作を行う場合は、外部メカニズムを使用して不一致を防止または検出してください。Directory Proxy Server エラーログを監視すると、不一致を監視できます。

### Directory Proxy Server 6.3.1 の既知の問題点

この節では、Directory Proxy Server 6.3.1 のリリース時に判明していた既知の問題点の一覧を示します。

- 5042517 DN 変更操作が、LDIF、JDBC、結合、およびアクセス制御データビューに対してサポートされていません。
- 6355714 現在、getEffectiveRight コントロールは、LDAP データビューでのみサポートされており、プロキシのローカルである ACI は考慮されません。

- 6356465 Directory Proxy Server で、(targetattr = "locality;lang-fr-ca") のようにターゲット属性へのサブタイプを指定する ACI が拒否されることがあります。
- 6360059 Directory Proxy Server では、データソース接続の失敗後に復元された JDBC データソース接続を再開できません。Directory Proxy Server が接続を再開できるのは、Directory Proxy Server インスタンスの再起動後のみです。
- 6383532 認証モードの設定を変更したときは、Directory Proxy Server を再起動する必要があります。
- 6386073 認証局によって署名された証明書の要求が生成されたあとで、更新すると証明書は自己署名済みの証明書として表示されます。
- 6388022 Directory Proxy Server によって使用される SSL ポートが正しくない場合に、そのポートに対するセキュリティー保護された検索要求のあとで Directory Proxy Server がすべての接続を閉じる場合があります。
- 6390118 プロキシ承認ではなくクライアントアプリケーション証明書に基づく認証を使用するように設定されたとき、Directory Proxy Server がリフェラルホップ数を正確にカウントできません。
- 6390220 データビューの作成時には base-dn プロパティを指定できますが、データビューの作成後に base-dn プロパティを "" (ルート DSE) に設定することはできません。
- 6410741 Directory Service Control Center では、値を文字列としてソートします。そのため、Directory Service Control Center で数字をソートすると、それらの数字は文字列であるかのようにソートされます。
- 0、20、および 100 を昇順にソートすると、0、100、20 というリストが得られます。0、20、および 100 を降順にソートすると、20、100、0 というリストが得られます。
- 6439604 アラートを設定したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。
- 6447554 Directory Proxy Server で、数値形式または辞書形式のデータ配布を設定したときに、別のデータビューに移動するエントリの名前変更に失敗します。
- 6458935 結合データビューを操作する場合、Directory Proxy Server は、その結合を構成するビューのデータ配布アルゴリズムを使用しません。
- この問題点に対処するには、結合とデータ配布を一緒に使用するとき、結合データビューのレベルでデータ配布を設定します。
- 6461510 Directory Proxy Server では、リフェラルのホップ制限が機能しません。

- 6469154 Windows では、`dsadm` および `dpadm` コマンドによる出力とヘルプメッセージが、簡体字中国語および繁体字中国語にローカライズされていません。
- 6469780 JDBC データソースエントリの作成は、動的に検出されません。JDBC データビューの作成前に JDBC サーバーを作成した場合は、データビューはサーバーの次回再起動時まで無視されます。このため、JDBC データソースを設定したあと、変更が検出されるようにするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。
- 6486578 クラス A がテーブルを二次として使用し、別のクラス B が同じテーブルを唯一の一次として使用している JDBC オブジェクトクラスの場合、B への要求は機能しません。Directory Proxy Server は、一次テーブルで使用されている `filter-join-rule` プロパティを無視できません。
- 6488197 Windows システムでのインストール後およびサーバーインスタンス作成後は、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダに対するファイルアクセス権により、すべてのユーザーにアクセスが許可されず。
- この問題点に対処するには、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダのアクセス権を変更します。
- 6488297 Windows では、DSCC の初期化は Administrator ユーザーしか実行できません。
- 6490763 Directory Proxy Server を介して Directory Server にアクセスしている場合、Directory Server の再起動後に、Access Manager で持続検索に関連したキャッシュの問題が発生する現象が確認されています。
- この問題点に対処するには、Directory Server を再起動したあと、Access Manager または Directory Proxy Server を再起動します。
- さらに細かいチューニングとして、Access Manager の試行の数や試行の間の遅延時間を増やして、持続検索の接続を再確立できます。これらのパラメータは、`AMConfig.properties` ファイル内の次のプロパティを変更することによって増やすことができます。
- 試行の回数を表す `com.ipplanet.am.event.connection.num.retries` を増やします。デフォルトは3回の試行です。
  - 試行の間の遅延時間(ミリ秒)を表す `com.ipplanet.am.event.connection.delay.between.retries` を増やします。デフォルトは3000ミリ秒です。
- 6490853 DB2 データベースによって設定された JDBC データビューを使用して検索を実行し、検索結果として非常に多くの数のエントリが返された場合、1,344 個のエントリを返したあとにエラーが発生することがあります。



この制限を克服するには、CLI/ODBC 設定キーワード CLIPkg の値を 30 に設定することで、大きなパッケージの数を増やします。その場合でも、検索結果の最大数は 11,712 エントリに制限されます。

詳細については、[DB2 のマニュアル](#)を参照してください。

- 6491133 Directory Service Control Center を使用して自己署名付き証明書を作成する場合、証明書名に複数バイト文字を使用しないでください。
- 6491845 Directory Proxy Server で許可されているデフォルトの LDAP コントロールは、Directory Service Control Center では表示されません。
- 6493349 Directory Service Control Center は、既存の除外されたサブツリーまたは代替検索ベースの DN を変更するときにコンマを削除します。
- 6494540 セキュリティー保護されていない LDAP アクセスをはじめて有効または無効にしたあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。
- 6497547 制限時間とサイズ制限の設定は、LDAP データソースでのみ機能しません。
- 6497992 コマンド `dpadm set-flags cert-pwd-store=off` を使用したあと、Directory Service Control Center を使用して Directory Proxy Server を再起動できません。
- 6501867 ASCII 文字と複数バイト文字の両方を組み合わせたサーバーインスタンス名とともに `dpadm start` コマンドを使用した場合に失敗する現象が確認されています。
- 6505112 既存の接続ハンドラに `data-view-routing-custom-list` プロパティを設定する場合、エスケープが必要な文字 (コンマなど) を含むデータビュー名を使用するとエラーが発生します。
- この問題点に対処するには、エスケープが必要な文字を含むデータビュー名を指定しないでください。たとえば、DN を含むデータビュー名を使用しないでください。
- 6510583 以前のバージョンとは異なり、マニュアルページ [allowed-ldap-controls\(5dpconf\)](#) で説明されているように、デフォルトでは Directory Proxy Server でサーバー側ソートコントロールはできません。
- Directory Proxy Server でのサーバー側ソートコントロールのサポートは、`allowed-ldap-controls` プロパティで指定される許可された LDAP コントロールのリストに `server-side-sorting` を追加することによって、有効にできます。

```
$ dpconf set-server-prop \
 allowed-ldap-controls:auth-request \
 allowed-ldap-controls:chaining-loop-detection \
 server-side-sorting
```

```

allowed-ldap-controls:manage-dsa \
allowed-ldap-controls:persistent-search \
allowed-ldap-controls:proxy-auth-v1 \
allowed-ldap-controls:proxy-auth-v2 \
allowed-ldap-controls:real-attributes-only \
allowed-ldap-controls:server-side-sorting

```

既存の設定値もあわせて設定する必要があることに注意してください。そうしないと、サーバー側ソートコントロールのみが許可されません。

- 6511264 Directory Proxy Server の DN 名前変更機能を使用する際に、同じ DN コンポーネントが繰り返し登場する場合は、それらは一括して変更されることに注意してください。

たとえば、`o=myCompany.com` で終わる DN の名前を、`dc=com` で終わるように変更する場合を考えてみます。たとえば、`uid=userid,ou=people,o=myCompany.com,o=myCompany.com` のように元のコンポーネントが繰り返されている場合、名前が変更された結果、DN は `uid=userid,ou=people,dc=com` となり、`uid=userid,ou=people,o=myCompany.com,dc=com` とはなりません。

- 6520368 Directory Proxy Server を介して Oracle 9 にアクセスするための JDBC 接続設定は、ドキュメントに記載されている手順どおりではありません。

ホスト `myhost`、ポート 1537 上で Oracle 9 サーバーが待機し、システム識別子 (SID) `MYINST` を持つインスタンスが存在する次の設定を考えてみます。このインスタンスには、データベース `MYNAME.MYTABLE` が含まれています。

一般的には、`MYTABLE` へのアクセスを設定するには、次のプロパティを設定します。

- JDBC データソースで、`db-name:MYINST` を設定します。
- JDBC データソースで、`db-url:jdbc:oracle:thin:myhost:1537:` を設定します。
- JDBC テーブルで、`sql-table:MYNAME.MYTABLE` を設定します。

ここまでの設定で機能しない場合は、さらに次のように `MYTABLE` へのアクセスを設定してみてください。

- JDBC データソースで、`db-name:(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=MYINST))` を設定します。
- JDBC データソースで、`db-url:jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=myhost)(PORT=1537)))` を設定します。
- JDBC テーブルで、`sql-table:MYNAME.MYTABLE` を設定します。



- 6527010 Directory Proxy Server は、テーブル間の多対多 (N:N) の関係を意味する JDBC 属性を JDBC データベースに書き込むことができません。
- 6539650 複数バイトの DN を持ち DSCC を使用して作成された Directory Proxy Server インスタンスは、Linux 上では起動できません。
- 6542857 Solaris 10 で Service Management Facility (SMF) を使用してサーバーインスタンスを有効にした場合、システムをリブートしてもインスタンスが起動しないことがあり、次のエラーを返します。
- ```
svcadm: Instance "svc:/instance_path" is in maintenance state.
```
- この問題を回避するには、ローカルユーザーを使用して Directory Server および Directory Proxy Server サービスを作成します。
- 6547755 パスに複数バイト文字を含む Directory Proxy Server インスタンスが DSCC に作成されない、起動されない、またはその他の通常のタスクを実行できない可能性があります。
- これらの問題の一部は、インスタンスの作成時に使用していた文字セットを使用することによって解決できます。文字セットを設定するには、次のコマンドを実行します。
- ```
cacaoadm list-params | grep java-flags
 java-flags=-Xms4M -Xmx64M

cacaoadm stop
cacaoadm set-param java-flags="-Xms4M -Xmx64M -Dfile.encoding=utf-8"
cacaoadm start
```
- これらの問題を回避するには、インスタンスパスに ASCII 文字のみを使用します。
- 6547759 HP-UX では、異なるロケールに設定された複数のブラウザセッションによって DSCC にアクセスした場合、DSCC には、ブラウザの設定ロケールと異なるロケールの文字が表示されることがあります。
- 6551076 マシンに複数のホスト名がある場合、コンソールは Directory Proxy Server インスタンスのバックエンド状態を取得しません。
- 6565106 RDBMS テーブルに、JDBC オブジェクトクラスの DN パターンに一致する重複エントリがある場合、JDBC データビューに対して検索が実行されると、重複サブツリー (リーフ以外) のノードが Directory Proxy Server によって返されます。たとえば、JDBC オブジェクトクラスに ou という DN パターンがあり、JDBC 属性 ou にマッピングされた RDBMS の列に重複エントリ (たとえば sales) がある場合、検索結果には ou=sales といったノードが重複して表示されます。

この問題を回避するには、次の手順を実行します。

1. 重複エントリが作成されないように、ou JDBC 属性にマッピングされた列を含むテーブルから値を取り除き、RDBMS ビューを作成します。
2. RDBMS テーブル名を、DN パターン ou を含む JDBC オブジェクトクラスの RDBMS ビュー名に置換します。ただし、RDBMS ビューは読み取り専用なので、Directory Proxy Server を通じて JDBC 属性 ou に値を追加できないという制限があります。

- 6567644 DPS が不正な DB 要求を作成します。
- 6573439 DSCC のインスタンスの「詳細な表示オプション」で、「アクセスログ」タブ、「エラーログ」タブ、および「監査ログ」タブの日付がローカライズされていません。
- 6583798 DSCC 6.0 では、DSCC でデータソースを作成する場合、useTCPNoDelay はデフォルトで false に設定されますが、管理コマンド `dpconf create-ldap-data-source` によってインスタンスを作成する場合は `use-tcp-no-delay` のデフォルト値が true に設定されます。
- 6588319 Tomcat サーバーで構成された DSCC で、「ヘルプ」および「バージョン」ポップアップウィンドウのタイトルに含まれる複数バイト文字が文字化けしています。
- 6590460 `dpadm show-cert dps-instance-path` コマンドの出力で、文字列 `owner` が簡体字中国語および繁体字中国語に翻訳されていません。
- 6592543 フランス語のロケールで、サーバーの停止または登録解除を確認するポップアップウィンドウに重複したアポストロフィーが表示されます。
- 6597598 LDAP と JDBC の両方で結合ビューに対して `modrate` ツールを使用して変更を行なっている場合、複数のスレッドを使用すると null ポインタ例外が発生します。次のようなエラーメッセージが表示されます。

```
java.lang.NullPointerException com.sun.directory.proxy.server.JoinDataView.
processModifyRequest(JoinDataView.java:916)
com.sun.directory.proxy.server.JoinDataViewOpContext.processModifyRequest
(JoinDataViewOpContext.java:243) com.sun.directory.proxy.server.ModifyOperation.
processOperation(ModifyOperation.java:502) com.sun.directory.proxy.server
.WorkerThread.runThread(WorkerThread.java:150)
com.sun.directory.proxy.util.DistributionThread.run
(DistributionThread.java:225)
```

- 6609603 新しいデータソースがデータソースプールに追加されると、サーバーの再起動が必要になります。
- 6639674 Directory Proxy Server 構成プロパティ `allow-bind-operations` が false に設定されている場合、`dpconf` コマンド行引数と `--secure-port` オプ

ションを使用して SSL ポートに接続することはできません。TLS の起動 (デフォルト) またはクリア接続 (--unsecured オプション) による接続は可能です。

- 6640597 basedn が元のマシンのものと異なるリフェラルに従って操作している場合、Directory Proxy Server は ADD 操作の DN を変更しません。リフェラルを転送するだけの場合とは対照的に、リフェラルに従うよう設定された Directory Server インスタンスを持つ Directory Proxy Server インスタンスに対して ADD を試行すると、間違った basedn により参照したサーバー上で ADD が拒否されます。
- ldapmodify コマンドを使用して ADD を Directory Server インスタンスに対して直接実行すると、ADD が機能します。
- 6642559 仮想変換の記述は、remove-attr-value 変換モデルには機能しません。
- 6642578 エントリを変更する場合、仮想変換の記述が期待どおりに動作しません。
- 6649984 証明書データベースに長さの短いパスワードを設定しても、警告が行われません。パスワードが短すぎても、Directory Service Control Center によって受け入れられます。cert サブコマンドを付けて dpadm コマンドを発行すると、コマンドがハングアップする可能性があります。
- 6711054 smalldatetime SQL タイプの属性値を追加しようとすると、次の例外が発生します。

```
ldap_modify: Operations error
ldap_modify: additional info: java.lang.Exception:
java.lang.Exception: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Conversion failed
when converting datetime from character string.
```

## Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1

次の節では、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 について説明します。

- [99 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 について」](#)
- [106 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 で修正されたバグ」](#)
- [110 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点」](#)
- [113 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 の既知の問題点と制限事項」](#)

## Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 について

このパッチでは、Directory Server Enterprise Edition 製品の Directory Proxy Server コンポーネントの問題だけが修正されます。このパッチは Directory Server Enterprise

Edition 6.3.1 の上に適用するように設計されています。Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の Directory Server コンポーネントは変更されません。

---

注 - Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 より前のバージョンにこのアップデートを適用することはできません。version 6.3.1 にアップグレードする手順については、表 2-1 「Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 へのアップグレードパス」を参照してください。

---

この節の内容は次のとおりです。

- 100 ページの「このリリースの新機能」
- 100 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 の拡張機能」
- 106 ページの「サポートされるプラットフォーム」

## このリリースの新機能

このアップデートは、主に 106 ページの「Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 で修正されたバグ」で説明されているバグを修正するマイナーリリースです。

Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 では、持続検索操作に新しい動作も導入されます。クライアントアプリケーションがディレクトリプロキシサーバーからの持続検索応答を読み取る速度が非常に遅い場合、プロキシサーバーの応答キューが過負荷になります。この場合、サーバーは次のクライアント通知で接続を閉じることができます。

```
LDAP_NOTICE_OF_DISCONNECTION [1.3.6.1.4.1.1466.20036]
```

また、次のような情報メッセージがログに記録されます。

```
[11/Aug/2009:18:13:51 +0200] - DISCONNECT - INFO - conn=19 \
reason="admin limit exceeded" \
msg="client didn't read any data during 160 milliseconds."
```

## Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 の拡張機能

Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 には、次の拡張機能があります。

`dpadm set -f flags/get -f flags` を使用して JAVA\_HOME を設定および取得する機能 (6765629)  
JAVA\_HOME のパス名を設定し、環境で定義されている JAVA\_HOME の値よりも優先させることができます。次の例を参照してください。

```
$ dpadm set -f flags instance-path jvm-path=/usr/jdk/latest/
```

## DPS 構成ファイルおよびログファイルの umask 値を設定および取得する機能 (6739456)

dpadm コマンドで umask 値を変更すると、DPS インスタンスの次回再起動時に、この新しい umask 値に従って構成ファイルのアクセス権が変更されます。同様に、ログファイルのアクセス権も次のファイルローテーション時に設定されます。次の例は、一般的な使用方法を示しています。

```
$ dpadm set-flags instance-path umask=22
```

同じ「MODEL, ACTION, ATTR\_NAME」で新しい仮想変換を追加できない (6722238) 管理者は、異なる仮想変換を同じ MODEL, ACTION, ATTR\_NAME で定義できるようになりました。

また、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 では、次の一覧に示すように新しいプロパティーが追加され、既存のプロパティーが更新されています。新しいプロパティーは「新規」と示されています。DSEE 6.3.1 での仕様から変更されたプロパティーは「更新」と示されています。

### close-client-connection (新規)

動的 (再起動不要)

レベル: connection-handler

型: ブール型

デフォルト: false

説明: 使用できるデータソースがない場合に、接続ハンドラがクライアント接続を閉じるかどうかを示します。

### data-view-use-internal-client-identity (新規)

動的 (再起動不要)

レベル: connection-handler

型: ブール型

デフォルト: false

説明: リモート LDAP サーバーへのバインドで、受信したクライアント ID を必ずしも使用する必要がないことを示します。

ドキュメント: このプロパティーは、リモート LDAP サーバーへのバインドで、受信したクライアント ID を必ずしも使用する必要がないことを示すフラグです。

### db-vendor (新規)

動的 (再起動不要)

レベル: jdbc-data-source

型: 列挙型

|               |                                                                                                       |
|---------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| mysql         | RDBMS バックエンドは MySQL です。                                                                               |
| derby         | RDBMS バックエンドは Apache Derby/Java DB です。                                                                |
| db2           | RDBMS バックエンドは DB2 です。                                                                                 |
| oracle        | RDBMS バックエンドは Oracle です。                                                                              |
| ms-sql-server | RDBMS バックエンドは Microsoft SQL Server です。                                                                |
| generic       | RDBMS バックエンドは定義されていません。可能な場合、Directory Proxy Server は jdbc-data-source で定義されている db-url からベンダー名を判定します。 |

デフォルト: generic

説明: JDBC データソースのベンダー名

ドキュメント: このプロパティは、JDBC データソースのベンダー名を指定しません。データベースベンダーによって提供されているドライバ以外の、サードパーティーの JDBC ドライバを使用して RDBMS バックエンドに接続する場合は、このプロパティを設定するようにしてください。可能な場合はこのデータを使用してベンダー固有の SQL 文が作成され、それによってパフォーマンスが向上する場合があります。

#### **numeric-lower-bound** (更新)

動的 (再起動不要)

レベル: jdbc-data-view、join-data-view、ldap-data-view、および ldif-data-view

新しい型: 長整数

以前の型 (DPS 6.0 から 6.3.1): 整数

その他の属性は以前と同じままです。

#### **numeric-upper-bound** (更新)

動的 (再起動不要)

レベル: jdbc-data-view、join-data-view、ldap-data-view、および ldif-data-view

新しい型: 長整数

以前の型 (DPS 6.0 から 6.3.1): 整数

その他の属性は以前と同じままです。

#### **down-monitoring-interval** (新規)

静的 (再起動が必要)

レベル: ldap-data-source

型: 期間 (秒単位) (下限: 1)

デフォルト: 継承 (monitoring-interval の値)

説明: 可用性モニターが障害のある接続をポーリングして接続の復旧を検出する間隔

ドキュメント: このプロパティはポーリング間隔を指定します。接続が切断状態であると検出されたら、可用性モニターはこの間隔で接続をポーリングして接続の復旧を検出します。指定されていない場合は、monitoring-interval プロパティの値が使用されます。

#### **monitoring-retry-count** (新規)

静的 (再起動が必要)

レベル: ldap-data-source

型: 整数 (下限: 1)

デフォルト: 3

説明: 接続を切断状態と判断する前に実行する再試行の数

ドキュメント: このプロパティは、接続が切断状態であると最初に検出されたときに可用性モニターが接続をポーリングする回数を指定します。これにより、接続の復旧をより早く検出できます。指定された回数だけ再試行したあとも接続に障害がある場合は、次に down-monitor-interval プロパティの値がポーリング間隔として使用されます。

#### **use-tcp-keep-alive** (新規)

動的 (再起動不要)

レベル: ldap-data-source

型: ブール型

デフォルト: true

説明: サーバーとデータソースの間の接続で SO\_KEEPALIVE を有効にするかどうかを指定します

ドキュメント: このプロパティは、サーバーとデータソースの間の接続で SO\_KEEPALIVE を有効にするかどうかを指定するフラグです。

#### **use-tcp-keep-alive** (新規)

動的 (再起動不要)

レベル: ldap-listener および ldaps-listener

型: ブール型

デフォルト: true

説明: クライアントとリスナーの間の接続で `SO_KEEPALIVE` を有効にするかどうかを指定します

ドキュメント: このプロパティは、クライアントとリスナーの間の接続で `SO_KEEPALIVE` を有効にするかどうかを指定するフラグです。

### **allow-unauthenticated-operations** (更新)

動的 (再起動不要)

レベル: server

型: ブール型

デフォルト: true

新しい説明: サーバーが未認証の操作を受け入れるかどうかを示します

以前の説明 (DPS 6.0 から 6.3.1): サーバーが匿名クライアントからの操作を受け入れるかどうかを示します

新しいドキュメント: このプロパティは、Directory Proxy Server が未認証の操作を受け入れるかどうかを示すフラグです。バインド操作の処理に使用されるモードは、`allow-unauthenticated-operations-mode` によって指定されます

以前のドキュメント (DPS 6.0 から 6.3.1): このプロパティは、Directory Proxy Server が匿名クライアントに操作の実行を許可するかどうかを示すフラグです。

### **allow-unauthenticated-operations-mode** (新規)

動的 (再起動不要)

レベル: server

型: 列挙型

|                                          |                                                    |
|------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| <code>anonymous-only</code>              | パスワードが指定されていない場合は、匿名バインドだけが許可されます                  |
| <code>dn-identified-only</code>          | パスワードが指定されていない場合は、DN の指定されたバインドだけが許可されます           |
| <code>anonymous-and-dn-identified</code> | パスワードが指定されていない場合は、匿名バインドおよび DN の指定されたバインドだけが許可されます |

デフォルト: `anonymous-and-dn-identified`

説明: パスワードなしでバインド操作を処理するモード



ドキュメント: このプロパティは、`allow-unauthenticated-operations` が `true` に設定されている場合に、パスワードのない操作を Directory Proxy Server がどのように処理するかを示します。

**time-resolution** (更新)  
静的 (再起動が必要)

レベル: server

型: 期間 (ミリ秒単位)

新しいデフォルト: 250

以前のデフォルト (DPS 6.0 から 6.3.1): 500

新しいドキュメント: このプロパティは、OS から時刻を取得する連続システムコールの間隔を指定します。所要時間が 250 ミリ秒未満の操作の詳細を確認するには、`time-resolution` を小さくするか、`time-resolution-mode` プロパティの値を変更します。0 ミリ秒に設定すると、プロキシは `time-resolution-mode` プロパティの値が `system-milli` に設定されている場合と同様に動作します。T`time-resolution-mode` プロパティの値が `system-milli` または `system-micro` に設定されている場合、このプロパティは無視されます。

以前のドキュメント (DPS 6.0 から 6.3.1): このプロパティは、OS から時刻を取得する連続システムコールの間隔を指定します。所要時間が 500 ミリ秒未満の操作の詳細を確認するには、`time-resolution` を小さくします。0 ミリ秒に設定すると、プロキシは計画的にシステムコールを実行して現在時刻を取得します。それ以外の場合、時刻はキャッシュされ、`time-resolution` 間隔でのみ取得されます。この時刻はログに表示されます。

説明は以前と同じままです。

**time-resolution-mode** (新規)  
静的 (再起動が必要)

レベル: server

型: 列挙型

|                                |                                                            |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------|
| <code>custom-resolution</code> | スレッドを使用して <code>time-resolution</code> ミリ秒ごとにシステムコールを実行します |
| <code>system-milli</code>      | システムコールを使用して時刻をミリ秒単位で取得します                                 |
| <code>system-micro</code>      | システムコールを使用して時刻をマイクロ秒単位で取得します                               |

デフォルト: `custom-resolution`

説明: システム時刻の取得に使用するモード

ドキュメント: このプロパティは、OSからの時刻の取得に使用するモードを指定します。

## サポートされるプラットフォーム

Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 は、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 でサポートされているすべてのプラットフォームに使用できます。詳細については、[26 ページの「ハードウェア要件」](#) および [27 ページの「オペレーティングシステムの要件」](#) を参照してください。

## Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 で修正されたバグ

この節では、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 で修正されたバグの一覧を示します。

- 6567644     Directory Proxy Server が不正なデータベース要求を作成します。
- 6590816     LDAP リスナーの connectionIdleTimeOutInSec を設定すると DSCC が無効になることがあります。
- 6641888     検索操作で、viewable-attr に存在しない属性を含むエントリが返されることがあります。
- 6648665     接続でいずれの操作も実行されていない場合、max-client-connections プロパティが適用されません。
- 6681502     メモリー監視がデフォルトで無効になっています。
- 6686150     数値配布アルゴリズムで、限界値の設定に int ではなく long を使用するべきです。
- 6717943     Directory Proxy Server のリソースプロパティのデフォルトのサイズ制限で、無制限を表す誤った整数が使用されます。
- 6721192     DN 変換が失敗します。
- 6721749     add-attr-value の設定により、DN 変換で誤った出力が生成されることがあります。
- 6722222     LDAP サーバーにバインドするとき、bindDN がマップされるべきです。(bindDN の DV の DN マッピング規則を使用)。
- 6722238     同じ「MODEL, ACTION, ATTR\_NAME」で新しい仮想変換を追加できません。
- 6723858     バックエンドディレクトリサーバーに設定された requires-bind-password プロパティが適用されません。

- 6734559 仮想属性に依存している場合、仮想 DN マッピングが失敗します。
- 6736621 変換に失敗すると、ビューに該当する場合でもバインド DN が拒否されます。
- 6737084 サーバー側からの方向の DN マッピングが正しくありません。
- 6739414 6.3 Directory Proxy Server が属性名の大文字小文字を変更します。
- 6739456 Directory Proxy Server で構成ファイルとログファイルにグループアクセス権を設定するように、お客様から要望がありました (umask 117、chmod 660)。
- 6751692 MaxTenuringThreshold Java 引数を使用している場合、dpadm start コマンドでコアダンプが発生します。
- 6758793 名前の変更されたエントリが DN マッピングで欠落することがあります。
- 6760526 dpadm で DPS.pid ファイルが生成されません。
- 6760951 Directory Proxy Server 設定スキーマが SystemMonitorThread.java 機能と矛盾しています。
- 6761032 searchMode パラメータに関して、サーバーとコンソールが矛盾しています。
- 6764073 プロキシ承認を使用するよう設定した場合、Directory Proxy Server が失敗します。
- 6765629 dpadm set-flags を使用して JAVA\_HOME を設定できるようにしてください。
- 6767776 rootDSE に対して DN マッピングを使用できません。
- 6774589 Directory Proxy Server には、複数値ネーミング属性を使用した仮想 DN 変換が必要です。
- 6778262 etime にマイクロ秒単位の精度を用意するべきです。
- 6778308 splitldif コマンドで仮想変換が無視されます。
- 6780423 高負荷でソケットが終了待機状態のままになることがあります。
- 6782659 Directory Proxy Server 6.3 で、ソケットが作成されたときに SO\_KEEPALIVE オプションが設定されません (つまり、setKeepAlive() != True)。
- 6798674 CR 6513526 の修正により、ConfigAttribute オブジェクトの null 値が原因でリグレッションが発生する可能性があります。
- 6802371 acceptBacklog プロパティがチャンネルベースのリスナーの場合に無視されます。

- 6808701 前回のアクティビティーが原因で、バックエンド接続のハートビートの送信頻度が不十分になります。
- 6808704 バインドされたバックエンド接続のハートビート停止が送信されません。
- 6808706 前回のサーバーアクティビティーが原因で、バックエンドサーバーの確認が十分な頻度で実施されない場合があります。
- 6809099 モニターエントリに対して `ldapsearch` を実行すると、矛盾した出力が得られることがあります。
- 6809712 可用性チェックでは、すべての接続を切断する前に、バックエンドサーバーが停止していることを確認する必要があります。
- 6817976 廃棄要求の場合に接続がブロックされることがあります。
- 6818788 バックエンドハートビートの精度向上が必要です。
- 6818926 サーバースocketでファイル記述子のリークが発生します。
- 6819304 ソースのないフェイルオーバープールを定義している場合、`cn=monitor` に対する検索で `null` ポインタ例外が発生することがあります。
- 6819315 Directory Proxy Server が、バインドに失敗したあとでディレクトリサーバーへの接続を開き続けます。
- 6819752 持続検索クライアントがエントリの変更通知を受信しない場合があります。
- 6821356 2つの接続で同じ ID が使用されることがあります。
- 6821752 クライアント接続の切断後に持続検索がクリーンアップされません。
- 6823036 データソースが切断状態と検出された場合の積極的監視の間隔は1秒に設定されるべきです。
- 6823593 Directory Proxy Server で、異なるクライアント操作が同じバックエンド接続に関連付けられます。
- 6827104 アイドル状態が `inactivity-timeout` を超えている場合、バックエンド接続が閉じられずに再利用されるため、接続のリークが発生します。
- 6827129 接続プールのハウスキーピングおよび健全性検査処理をデバッグする必要があります。
- 6828462 2つの長い同時バインドで、同じバックエンド接続が2つのクライアント接続に割り当てられます。
- 6828841 誤った `jvm-path` を設定すると、警告なしで再起動がハングアップします。

- 6828842 利用可能なバックエンドサーバーがない場合、Directory Proxy Server が誤ったエラーコードを返します。
- 6828896 「バックエンド接続を取得できない」場合にクライアント接続を閉じるためのオプションを用意する必要があります。
- 6832043 useAffinity=false および affinityPolicy が明示的に設定されている場合、クライアントアフィニティーを有効にするべきではありません。
- 6835931 データソースホストのいずれかが到達不能な場合、Directory Proxy Server を起動できません。
- 6836922 dpconf コマンドは、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 で導入された新しい属性をサポートする必要があります。
- 6837295 dpconf コマンドはバインド DN マッピングをサポートする必要があります。
- 6837392 Directory Proxy Server のプロパティの管理で、より単純なバージョン管理を可能にする必要があります。
- 6837970 dpconf は monitorRetryCount をサポートする必要があります。
- 6839452 クライアントアフィニティーで、データソースの読み取り専用フラグが無視されます。
- 6844727 CR 6714425 および 6714448 の修正の実装を完了する必要があります。
- 6851216 小文字の結合式を使用すると、SQL 要求が失敗することがあります。
- 6854864 100 を超えるクライアントが持続検索を実行する場合、Directory Proxy Server 6.3.1 のパフォーマンスが不十分です。
- 6855978 持続検索スレッドのループにより、Directory Proxy Server が持続検索を処理できなくなります。
- 6859116 持続検索のパフォーマンスが不十分です。
- 6860746 20 の持続検索を作成してから停止すると、持続検索機能が失敗します。
- 6868131 特定の属性マッピングや仮想変換で、Directory Proxy Server が StringIndexOutOfBoundsException を返す場合があります。
- 6868804 変換およびマッピングの規則が期待どおりに実行されません。
- 6870051 スレッドの解放が早すぎ、ASN.1 例外が発生することがあります。
- 6870452 バックエンドが停止すると、Directory Proxy Server が誤ったエラーを返します。
- 6870496 予期しない null ポインタ例外が発生することがあります。
- 6874644 状況によっては、パスワード格納スキーマが JDBC データビューで無視されることがあります。

- 6879124 1つのクライアント接続に複数のユーザーがバインドされている場合、Directory Proxy Server が同一の結果を返すことがあります。
- 6881972 状況によっては、JDBCを使用しているとき、Directory Proxy Server が起動に失敗することがあります。
- 6886109 予期しないASN1例外が発生し、処理されないことがあります。

## Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストールの注意点

ここでは、次の内容について説明します。

- 110 ページの「ソフトウェアの入手」
- 111 ページの「インストール手順」

### ソフトウェアの入手

Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 は、インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 に適用されるパッチです。Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 より前のバージョンを実行している場合は、第2章「インストールの注意点」の説明に従ってまず version 6.3.1 にアップグレードしてから、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 パッチを適用する必要があります。

Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 パッチは [http://www.sun.com/software/products/directory\\_srvr\\_ee/get.jsp](http://www.sun.com/software/products/directory_srvr_ee/get.jsp) からダウンロードできます。

Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 は、1つですべての DSEE プラットフォームに対応するパッチです。

- Solaris SPARC
- Solaris 9 x86
- Solaris 10 x86 および AMD x64
- Red Hat Linux
- SuSe Linux
- HP-UX
- Windows

各プラットフォームに次の配布が用意されています。

- ネイティブパッケージ配布 (HP-UX 以外)
- ZIP 形式の配布

Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 パッチ 141958-01 は [SunSolve \(http://sunsolve.sun.com\)](http://sunsolve.sun.com) から入手でき、次に示す両方の種類のインストールに適用されます。

- Java ES インストーラを使用してインストールされた Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 ネイティブパッケージ
- Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 の ZIP インストール

## インストール手順

この節では、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のインストール方法について説明します。

### ▼ Directory Proxy Server 6.3.1 の ZIP インストールとネイティブパッケージインストールにパッチを適用するには

始める前に

注 - Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 パッチを適用する前に、Directory Server Enterprise Edition のインストールディレクトリをバックアップします。これは、以前の Directory Proxy Server 構成をあとで復元することはできないためです。この注意は ZIP インストールとネイティブパッケージインストールの両方に当てはまります。

- 1 パッチ **141958-01** を **Sunsolve** から *downloaded-patch-path* ディレクトリにダウンロードします。
- 2 パッチの適用対象となるインストールに関連付けられた **Directory Proxy Server** インスタンスを停止します。
- 3 **Windows** システムでは、コマンドプロンプトウィンドウを開きます。**UNIX** システムでは、端末ウィンドウを開きます。
- 4 カレントディレクトリを、更新するプラットフォームと配布 (**ZIP** または **ネイティブ**) のインストールソフトウェアがあるディレクトリに変更します。  
次の例は、この目的のための一般的なコマンドを示しています。

```
$ cd downloaded-patch-path/SunOS_x64/zip/delivery
```

次の表は、*downloaded-patch-path* ディレクトリの下でのインストールソフトウェアの場所を示します。

| オペレーティングシステム  | ZIP 配布を格納するディレクトリ  | ネイティブパッケージ配布を格納するディレクトリ |
|---------------|--------------------|-------------------------|
| Solaris SPARC | SunOS/zip/delivery | SunOS/native/delivery   |

| オペレーティングシステム               | ZIP 配布を格納するディレクトリ      | ネイティブパッケージ配布を格納するディレクトリ   |
|----------------------------|------------------------|---------------------------|
| Solaris 9 x86              | SunOS_x86/zip/delivery | SunOS_x86/native/delivery |
| Solaris 10 x86 および AMD x64 | SunOS_x64/zip/delivery | SunOS_x64/native/delivery |
| Red Hat Linux              | Linux/zip/delivery     | Linux/native/delivery     |
| SuSE Linux                 | Linux/zip/delivery     | Linux/native/delivery     |
| HP-UX                      | Hpux/zip/delivery      | なし                        |
| Windows                    | Windows/zip/delivery   | Windows/native/delivery   |

**5 UNIX システムでは、インストールスクリプトを起動します。**

次のコマンドを実行します。

```
$ Install dsee631-install-path
```

ここで、*dsee631-install-path* は Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 がインストールされているディレクトリのパスです。

次のメッセージが表示されます。

```

IMPORTANT :
Make sure all the DPS instances associated with the Directory Proxy Server
installation being patched are shutdown prior to apply the Directory Proxy
Server 6.3.1 Update 1 Patch

```

```
Do you want to proceed with the installation (y/Y to proceed, n/N to abort) [n] ?
```

yes を表す **y** を入力します。インストールプログラムによって、指定した Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 インストールにパッチが適用されます。

**6 Windows のインストールでは、コマンドプロンプトウィンドウで次のコマンドを実行します。**

**Install.exe**

ウィザードが開き、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 パッチをインストールする正しいインストールパスを選択するように求められます。6.3.1 の ZIP インストールにパッチを適用する場合は、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 をインストールしたディレクトリを選択します。ネイティブパッケージインストールにパッチを適用する場合は、C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE を選択します。

ウィザードによって、Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 にパッチが適用されます。

**7 インストールが正常に終了したことを確認するために、次の 2 つのコマンドを実行し、次に示すものと同じ応答が得られることを確認します。**

```
$ dpadm -V
[dpadm]
```



```
dpadm : 6.3.1.1 B2009.1106.0156 ZIP
```

```
[DPS]
Sun Microsystems, Inc.
Sun-Java(tm)-System-Directory-Proxy-Server/6.3.1.1 B2009.1106.0259
$ dpconf -V
[dpconf]
clip.jar : 6.3.1 B2008.1121.0155
dpcfg.jar : 6.3.1.1 B2009.1106.0155
dpcfgcli.jar : 6.3.1.1 B2009.1106.0155
common.jar : 6.3.1 B2008.1121.0155
common_cfg.jar : 6.3.1 B2008.1121.0155
```

- 8 この手順は、パッチを適用する **Directory Server Enterprise Edition 6.3.1** に **CR 6722222** のホットフィックスが含まれている場合に必要です。

CR 6722222 のホットフィックス (LDAP サーバーにバインドするとき、bindDN をマップする (bindDN の DV の DN マッピング規則を使用)) が適用されている場合は、すべてのインスタンスで各接続ハンドラについて次のコマンドを実行します。

```
$ dpconf set-connection-handler-prop -p port -h host connection handler \
 data-view-use-internal-client-identity:true
```

このプロパティは、リモート LDAP サーバーへのバインドで、受信したクライアント ID を必ずしも使用する必要がないことを示すフラグです。CR 6722222 を適用したあとは、例に示すように、デフォルトの動作を接続ハンドラのプロパティで設定できるようになります。

- 9 すべてのプロキシサーバーインスタンスを再起動します。

## Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 の既知の問題点と制限事項

この節では、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のリリース時に判明していた既知の問題点と制限事項の一覧を示します。

---

注 - Directory Proxy Server 6.3.1 の既知の問題点と制限事項は、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のパッチを適用したあとも残ります。これらの問題点の詳細については、92 ページの「[Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項](#)」を参照してください。

---

### Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 の既知の制限事項

この節では、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のリリース時に判明していた既知の制限事項の一覧を示します。

『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Reference](#)』の「[JDBC Object Classes](#)」で説明されているとおり、JDBC テーブルの定義には一次テーブルと二次

テーブルが使用されます。Directory Proxy Server では、二次テーブルが3番目のテーブルの一次テーブルとなることは許可されません。つまり、Directory Proxy Server では1レベルを超える結合ルールはサポートされません。

## Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 の既知の問題

この節では、Directory Proxy Server 6.3.1 Update 1 のリリース時に判明していた既知の問題の一覧を示します。

6728746 リリース 6.3 では、エントリに3つ以上のオブジェクトクラスがある場合、結合ビュー (LDAP と JDBC) からエントリを追加しようとすると、CR 6636463 の修正が原因で失敗します。このようなエントリを追加するには、次の `ldapmodify` により、`jdbc-object-class` 設定エントリでこれらのオブジェクトクラスをスーパークラスとして定義する必要があります。これは、`dpconf set-jdbc-object-class-prop` で追加できるスーパークラスは1つだけだからです。

この例では、次のエントリを追加します。

```
dn: uid=test,ou=people,o=join
sn: User
cn: Test User
objectclass: top
objectclass: person
objectclass: organizationalPerson
objectclass: inetOrgPerson
uid: test
userpassword: password
givenname: Test
mail: test@example.com
telephonenumber: 8888-8888
roomnumber: 8000
```

JDBC ビューは次の例に示すように定義されており、リリース 6.3 より前は機能していました。

```
dn: cn=person,cn=example-view,cn=data views,cn=config
secondaryTable: country1
secondaryTable: phone1
primaryTable: employee1
objectClass: top
objectClass: configEntry
objectClass: jdbcObjectClassMapping
dnPattern: uid
cn: person
superclass: top
```

追加するエントリには `objectClass:organizationalPerson` と `objectClass:inetOrgPerson` の両方が存在するため、次の `ldapmodify` コマンドに示すように、両方のオブジェクトクラスをスーパークラスとして指定する必要があります。

```
$ ldapmodify -p dpsPort -D "cn=Proxy manager" -w password
dn: cn=person,cn=example-view,cn=data views,cn=config
changetype: modify
add: superClass
superClass: inetOrgPerson
-
add: superClass
superClass: organizationalPerson
```

この `ldapmodify` の実行後、`jdbc-object-class` は次の例のように定義されます。

```
dn: cn=person,cn=example-view,cn=data views,cn=config
secondaryTable: country1
secondaryTable: phone1
primaryTable: employee1
objectClass: top
objectClass: configEntry
objectClass: jdbcObjectClassMapping
dnPattern: uid
cn: person
superclass: top
superclass: inetOrgPerson Added
superclass: organizationalPerson Added
```

6826694

ドキュメントでは、`log-level-data-sources-detailed` プロパティのデフォルト設定は `none` と記述されていますが、実際のデフォルト値は `all` です。ただし、`log-level-data-sources-detailed` を `none` 以外の値に設定すると、サーバーのパフォーマンスに影響し、`access` ファイルが急速に拡大します。そのため、DPS サーバーインスタンスの作成時に `log-level-data-sources-detailed` プロパティの値は自動的に `none` に設定されます。このプロパティをほかの値に設定しないことをお勧めします。

6832498

[脆弱性に関する注意 VU#836068 「MD5 が衝突攻撃に対して脆弱」](http://www.kb.cert.org/vuls/id/836068) (<http://www.kb.cert.org/vuls/id/836068>) で説明されている問題のため、Directory Proxy Server で署名付き証明書に MD5 アルゴリズムを使用することは避けるべきです。

証明書の署名アルゴリズムを調べるには、次の手順を使用します。

1. 次のコマンドを実行して、特定の Directory Proxy Server インスタンスに定義されている証明書の一覧を表示します。

```
$ dpadm list-certs instance-path
```

2. 定義されている各証明書について次のコマンドを実行し、証明書が MD5 アルゴリズムで署名されているかどうかを調べます。

```
$ dpadm show-cert -F ascii -o cert-output-file \
dps-instance-path cert-alias
```

```
$ dsadm add-cert ds-instance-path cert-alias \
cert-output-file
```

```
$ dsadm show-cert ds-instance-path cert-alias
```

次の例は、MD5 署名アルゴリズムで署名されている証明書に対して `dsadm show-cert` コマンドを実行した場合の一般的な出力を示しています。

```
Certificate:
 Data:
 ...
 Signature Algorithm: PKCS #1 MD5 With RSA Encryption
 ...
```

3. 次のコマンドを実行して、MD5 署名されたすべての証明書をデータベースから削除します。

```
$ dsadm remove-cert instance-path cert-alias
```

次の手順を使用して、証明書データベースのパスワードを更新します。(dpadm コマンドは、ディレクトリプロキシサーバーインスタンスの作成時にデフォルトの証明書データベースパスワードを生成します。)

1. Directory Proxy Server インスタンスを停止します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
$ dpadm set-flags instance-path cert-pwd-prompt=on
```

パスワードの入力を求めるメッセージが表示されます。

3. 8文字以上のパスワードを入力します。
4. Directory Proxy Server インスタンスを再起動し、入力が求められたら Internal (Software) Token を指定します。

MD5 機能を使用しているすべての証明書を、SHA-1 署名アルゴリズムを使用する証明書で置き換えます。インストールで自己署名付き証明書を使用するか認証局から取得した証明書を使用するかに応じて、次のどちらかの手順を使用します。

次の手順を使用して、自己署名付き証明書を生成し、保存します。

1. 次のコマンドを実行します。

```
$ dpadm add-selfsign-cert --sigalg SHA1withRSA \
dps-instance-path cert-alias
```

---

注 - デフォルトの署名アルゴリズムは MD5withRSA です。

---

次のプロンプトが表示されます。

```
[Password or Pin for "NSS Certificate DB"]
```

2. 新しい証明書データベースパスワードを入力します。

次の手順を使用して、認証局 (CA) から証明書を取得し、保存します。

1. 次のコマンドを実行して、認証局によって署名されたサーバー証明書の要求を発行します。

```
$ dpadm request-cert --sigalg SHA1withRSA instance-path cert-alias
```

2. 認証局で MD5 署名アルゴリズムが使用されなくなっていることを確認してから、認証局によって署名されたサーバー証明書を受け取るための証明書要求を認証局 (使用している規則に応じて社内または社外の) に送信します。詳細については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド](#)』の「[CA 署名付きサーバー証明書を要求する](#)」を参照してください。

3. 認証局から新しい証明書が送信されたら、次のコマンドを実行して証明書を証明書データベースに追加します。

```
$ dpadm add-cert instance-path cert-alias
```

この手順については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド](#)』の「[Directory Proxy Server 用の証明書の作成、要求、インストール](#)」を参照してください。

4. 信頼できる認証局証明書がまだ証明書データベースに保存されていない場合は、次のコマンドを実行して追加します。

```
$ dpadm add-cert --ca instance-path trusted-cert-alias
```

この手順については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 管理ガイド](#)』の「[Directory Proxy Server 用の証明書の作成、要求、インストール](#)」を参照してください。

5. 次のコマンドを実行して、新しい証明書が使用されていることを確認します。

```
$ dpadm show-cert -F ascii -o cert-output-file \
dps-instance-path cert-alias
```

```
$ dsadm add-cert ds-instance-path cert-alias \
cert-output-file
```

**\$ dsadm show-cert ds-instance-path cert-alias**

6854861 Microsoft SQL Server バックエンドでは、smalldate フィールドを使用するときに長形式の日時だけがサポートされ、ほかの形式では次の例のような変換エラーが発生します。

```
ldap_modify: Operations error
ldap_modify: additional info: java.lang.Exception: \
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: \
Conversion failed when converting datetime from character string.
```

---

注 - 長形式の日時は YYYY-MM-DD HH:MM です。

---

## Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Identity Synchronization for Windows のリリース時に入手可能な製品固有の情報が含まれています。

インストールで Identity Synchronization for Windows を使用している場合で、最新の NSS パッチ 3.12 をシステムに適用済みのときは、[43 ページの「パッチを使用して共有コンポーネントをアップグレードするには」](#)の [step 8](#) に従って、NSS パッチ 3.12 で提供されている新しいライブラリへのシンボリックリンクを設定してください。

## Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 には、Identity Synchronization for Windows に対する変更は含まれていません。詳細については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Release Notes](#)』を参照してください。

この節では、PN\_DSEE; 6.3.1 のリリース後に判明した Identity Synchronization for Windows 製品の既知の問題点と制限事項の一覧を示します。

- 6572575 正しく同期させるには、グループおよびグループメンバーが DIT の同一レベルに存在しなければなりません。また、グループに 1001 を超えるメンバーを含むことはできません。
- 6721443 ISW コネクタのデバッグログが有効になっている場合、コネクタが同期手順に到達できません。
- 6879679 Solaris オペレーティングシステムを `shutdown -i6 -g0 -y` コマンドでリブートする場合、Identity Synchronization for Windows の停止メソッドが呼び出されず、`pid.txt` ファイル内の `pid` が消去されません。その結果、オペレーティングシステムのリブート後に Identity Synchronization for Windows が自動的に起動しないことがあります。

この制限に対処するには、`/etc/rc2.d/K41isw` から `/etc/rc0.d/K41isw` へのハードリンクを作成します。

```
$ ln /etc/rc2.d/K41isw /etc/rc0.d/K41isw
```



## Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Directory Editor のリリース時点で入手可能な製品固有の情報を示します。

### **Directory Editor** の修正されたバグと既知の問題点

Directory Server Enterprise Edition 6.3.1 には、Directory Editor に対する変更は含まれていません。詳細については、『[Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.3 Release Notes](#)』を参照してください。



## Directory Server Resource Kit の修正された バグと既知の問題点

---

この章では、Directory Server Resource Kit のリリース時に入手可能な製品固有の重要情報が含まれています。

この章では、次の内容について説明します。123 ページの「[Directory Server Resource Kit の既知の問題点と制限事項](#)」

### Directory Server Resource Kit の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

- 5081543 searchrate は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。
- 5081546 modrate は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。
- 5081549 authrate は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。
- 5082507 dsmlsearch コマンドの `-D` オプションは、バインド DN ではなく HTTP ユーザー ID を取ります。
- この問題点に対処するには、Directory Server 内の DN にマップされたユーザー ID を指定します。
- 6379087 NameFinder を Windows システム上の Application Server に配備できない現象が確認されています。
- 6393554 NameFinder が、配備のあとにエラーが見つからないページをスローする現象が確認されています。
- この問題点に対処するには、`nsDSRK/nf` の名前を `nsDSRK/NF` に変更します。

- 6393586 NameFinder の「My Selections」リストには、2 名を超えるユーザーを追加できません。
- 6393596 NameFinder では、「LastName」、「FirstName」、「Email」、および「GivenName」以外のエン트리値を検索できません。
- 6393599 NameFinder では、グループの検索ができません。
- 6565893 idsktune コマンドは、SuSE Enterprise Linux 10 をサポートしていません。
- 6576045 modrate および searchrate 起動プログラムを終了しても、実際の modrate および searchrate の各プロセスは終了しません。
- 6754994 idsktune コマンドが、getrlimit() で誤ったシステム制限を表示します。次の警告メッセージが表示されます。

```
WARNING: processes are limited by RLIMIT_DATA to 2047 MB in size.
WARNING: processes are limited by RLIMIT_VMEM to 2047 MB in size.
WARNING: processes are limited by RLIMIT_AS to 2047 MB in size.
```